イザベラ・バードの生前に出版された *Unbeaten Tracks in Japan* の４種の版における違い
――思考・行動の変化を反映した改訂――

高　畑　美代子

要旨：

イザベラ･バードの日本旅行記である*Unbeaten Tracks in Japan*（『日本の未踏路』）は1880年の初版以来何回かの改訂を重ねながら現在に至るまで100年以上の年月にわたり、さまざまな出版社により版を重ねられてきた。書名はいずれも同じこの表記であるが、副題は４種類ある。また、版によって削除の仕方、イラストの目録や地図、付録、索引の有無が異なる。ニューヨークのパトナムズサンズ版のように、手紙形式をとらなかった版もある。特にイザベラ･バード（ビショップ夫人）の存命中の改訂および再出版には本人の意思が働き、メッセージが付与されて、そこに著者の思考および行動の変化の表れが認められる。

そこで、各版の副題、構成（地図、付録、索引等）を比較しそれぞれの特徴を検討した。副題の違いからアメリカでは騎馬旅行が強調されたこと、晩年の1900年の出版では、「談、記事」とあった出だしを「記録」と変えて、研究書としての自負を示したものと考えられる。

また、初版と省略版の項目を比較して削除項目を検討したところ、内容的には、第１巻からは日本の民俗や俗信・迷信に関する項目、第２巻ではキリスト教とその伝道拠点や日本の宗教と教育に関するものが多かった。前者からは説明的要素を除いて、より軽快な旅の冒険に重点を置き、後者からは、日本の近代化を示すものを除いて、アイヌ人に話題を絞ったことが読み取れる。これにより、『日本奥地紀行（アンビートン・トラックス・イン・ジャパン）』は面白い旅の本になった。

最後の単行本の出版となった1900年の新版のわずかな変更からは、教会の外にいて、アジアの医療伝道に寄与したビショップ夫人の終生の仕事のはじまりがこの本にあったことを思い浮かべさせる誇り高い姿が見て取れる。本論は、彼女の読者が手にした各版が、他とどう異なっているのか、あるいは同じなのかを知る手がかりなるものである。また同時にこれら諸版の出版が彼女の人生とどのような関係があるのかを解明するものである。

キーワード：ミス・イザベラ・バード、ビショップ夫人、『日本奥地紀行』、省略版

Comparative Bibliological Study of Variations among Four *Ante mortem* Editions of *Unbeaten Tracks in Japan* by Miss Isabella Bird (Mrs. Bishop): The Revisions Reflecting the Lifelong Changes of Her Way of Behavior and Modes of Thinking

Miyoko TKAHATA

Abstract：

Since 1880 *Unbeaten Tracks in Japan* by Isabella Bird has been published, being revised several times, for more than 100 years. Though the main title for all of these editions remains the same,

the subtitles have four types. In addition, each publication has differential styles of its own in the way of abridgement, and the presence or absence of the lists of illustrations, maps, appendices and indices, and so on. And the edition by Putnam's Sons in New York does not take the epistolary style, i.e. that of a compilation of personal letters which all the other editions used to take as their standard and characteristic form.

I suppose that there should have been some special working of her own will upon the revised and new editions executed during Miss Isabella Bird's (Mrs. Bishop's) life time, sending her messages to each of them, so that we can recognize the appearance of transitions in her thoughts, as well as in the mode of her performances.

Thus I compared the subtitles and compositions (illustrations, maps, appendices, indices, etc.) of various editions and versions. The differences in subtitles indicate that, for instance, in the States, the "TRAVELS ON HORSEBACK" emphasizes the equestrian travels. And, while in former editions the subtitles were termed as "**An Account** of Travels," in 1900 edition, they were changed into as "**A Record** of Travels," etc. which seems to suggest the author beginning to show her self-pride in writing a factual and academic records, and not just traveling anecdotes.

And also from the comparison of the first full-fledged edition and later abridged on, those terms omitted indicate that, from the first volume, those concerned with Japanese Folklores and superstitions or vulgar beliefs, and from the second, those contents on Christianity and its commission stations, and on Japanese religions, as well as on education are cut off mostly. The intension of those eliminations can be inferred as, in the former, deleting explanatory descriptions, thus showing the light-footed expeditions straight-forwardly, and in the latter, skipping the topics on the modernization of Japan and instead focusing on the life of Ainu people. As a consequence, *Unbeaten Tracks in Japan* turned into an interesting reading on travels through Northern part of Japan.

In the changes added to her last book, i.e. the new 1900 edition, though small and a few, it was revealed that her initial turning to her life work of dedicating herself to the medical commission can be proudly traced to this volume. Present discussions on the alterations applied to her book would hopefully confer to their readers some knowledge on the similarities and differences among their various editions.

Key words：Miss Isabella L. Bird, Mrs. Bishop, *Unbeaten Tracks in Japan*, travels on horseback, abridged editions

はじめに

イザベラ・バード（ビショップ夫人［Isabella L. Bird；Mrs. Bishop、1831-1904］）の1878年の日本旅行を記した*Unbeaten Tracks in Japan*（『日本の未踏路』）は1880年の初版以来幾つかの大小の改訂を重ねながら現在に至るまで100年以上の年月にわたり、さまざまな出版社により版を重ねられてきた。主題（メーン・タイトル）はいずれも*Unbeaten Tracks in Japan*であるが、彼女の生前に出された４種の改訂版の副題（サブ・タイトル）には同じものがない。また版によって削除の仕方、イラスト・図表や地図、付録、索引の有無が異なる。さらに、同内容ながら表紙絵が全く異なり、手紙形式をとらなかったニューヨーク版のように、読み手の受ける印象が異なると思われるものもある。

初版はロンドンのマレー社から２巻本で出され、またほぼ同時にニューヨークでもファクシミリ版

が出て、どちらも当時のベストセラーとなった。1885年に、マレー社から初版の２巻本を半分以下にした省略版が出て、この版はそののち多くのペーパーバックの原本となり現在まで途切れることなく刊行されてきた。1900年にはジョージ・ニューンズ版が１巻本ではあるが、初版の２巻本をほぼ完全に復活させた内容で新版として出された。

これらイザベラ・バードの生前に刊行された計４版の*Unbeaten Tracks in Japan*の改訂および再出版には、彼女自身の意思が働き、そこには著者の思考や行動の変化の顕れが認められ、そこには何らかのメッセージがあるものと考えられる。

しかし、彼女の生涯で*Unbeaten Tracks in Japan*がなぜ４回の改訂出版がなされ、どのように変わったのかを詳細に比較検討した研究はされてこなかった。

本稿では彼女の存命中に出版された４種類の*Unbeaten Tracks in Japan*を対象として表紙や写真、小題、柱（本の上部の内容表示）、各版の削除と追加および細かい変更等を出来る限り精査して、改定の意図やその背景と効果について分析・検討を進めた。

さらに彼女の没後出版された諸本がこの４版のいずれを定本とするのかに分類して、その特長を示した。

本稿は現在までに英米および日本で出版されていて筆者が知悉出来た限りでの本を比較するという方法により、各版の特徴を分析・検討して、*Unbeaten Tracks in Japan*の英語版を手にした読者が、それがどのような削除あるいは追加、変更を加えられた版・本で、それが著者の人生とどのように関わっているのかを一望できるような資料を提供することを目標とするものである。

Ⅰ．著者の生前に出版された４版の*Unbeaten Tracks in Japan*概略

１．問題の所在

1885年に初版（1880）の内容の半分以上を削除して出された*Unbeaten Tracks in Japan*（『日本奥地紀行』）の扉には***NEW EDITION, ABRIDGED***［新版・省略版］（図６）と明示されていたので、その本が省略版であることの問題はなかった。しかし、省略版の第３版（1888）ではその記載がなくなり、単に***THIRD EDITION*** と版名のみが示されている（図７）[1)]。以後の版では、***ABRIDGED***［省略版］の文字が消えたことにより、全く同じ表紙の1885年版を手にした読者がそれを初版の重版と勘違いして、ますます事態を混乱させたと思われる。

例えば1968年に日本で最初にこの本を紹介した神成利男[2)]は、マレー社の省略新版（1911年刷り）をもとに北海道の部分を訳出しているが、２巻本の存在に気がつかず、次のように記している。

> しかし女史の旅行記は表題にあるように、当時の外国人が主として関東以南の京都、奈良、大阪などのいわば先進開花の地方を視察したのとは反対に日本東北部の、しかも山間僻地を特に選んで視察した記事であって、ここに本書の特徴があり……」（『コタン探訪記』p.2）

日本人だけではなく、100年以上前にイザベラに直接頼まれ、委託された日記と手紙を主に、ほとんどの資料を所蔵しているマレー社の支援で書かれた*Life of Isabella Bird*（『イザベラ・バードの生涯』）（1907）の著者ストッダート（Anna M. Stoddart）でさえ２種の版の存在を失念していたようなのである。彼女はイザベラの日本滞在の後半について次のように記している。

> ミス・バードの本部は今や２ヶ月近くも東京の公使館であった。サトウ氏は彼女のメモや統計を確証し、正して、彼女を助け、ハリー・パークス卿は彼女の短期の探索の遠出[3)]をできる限りの方法で推進した[4)]。

この通りであるとするならばイザベラが北海道から戻っての関西旅行はなかったことになってしまう。また次に示すＦ・Ｖ・ディキンズによる『パークス伝』の記述とも矛盾する。

> サー・ハリー・パークスから妻へ宛てて
>
> 江戸　十二月十八日
>
> まず第一に記さなければならぬことですが、先ほどバード女史［英国女流旅行家。この年五月に来日し、東京から東北地方、北海道を旅行。『日本奥地紀行』を著す］にさようならを言ったところです。彼女は公使館に十日間滞在した。……彼女のもつ莫大な情報の中から、いろいろ話を聞くのは、いつも楽しい。彼女は大そう御世話になったと言って、深く感謝していた。あなたに御礼の手紙が来ているので同封する。私にも二通来た。彼女がこの前に公使館に来たのが半年前であったが、あのときより私がずっと元気になったと書いている。あなたも喜んでくれると思う。(F. V. Dickins［1894］、高梨健吉訳［1984］『パークス伝』[5]、平凡社、pp.263-4、注：括弧内は高梨による訳注)

ストッダートの記述とは明らかに矛盾しているが、半年前というのは北日本の旅行に立つ前のことであり、また10日間というのは日本を離れる直前の東京の公使館滞在である。

イザベラが函館から東京に戻ったのは９月17日で、10月12日には神戸に向けて広島丸に乗船しているのである。彼女が２ヶ月も東京にいるはずがないにもかかわらず、何故このように明らかな間違いが生じたのだろうか。

また2003年に出た*Letters to Henrietta*（『ヘンリエッタへの手紙』）[6]には妹ヘンリエッタ宛の日本旅行時の手紙類や日記が断片を除いて残っていないと記されている。編集者のケイ・チューバック（Kay Chubbuck）は、残っていた友人のエラ・ブラッキー（Mrs. Ella Blackie）宛ての手紙から京都および日本の南に旅行することは分かるが、「伊勢と京都旅行は*Unbeaten Tracks in Japan*には出ていない」と次のように日本旅行記の資料について記している[7]。

> 不運なことに、イザベラが日本で過ごした６ヶ月の間のヘンリエッタ宛の手紙は見あたらないようである。わずかに残っているのは1878年の11月末の京都から伊勢への２週間の旅行期間の日記の断片だけであり、ついでに言うと、これは*Unbeaten Tracks in Japan*には出ていない旅行だ。これらの記録は短くて、ざっとしたもので興味に欠ける――飽き飽きする宿、寺、泥道の退屈な記録であり、彼女の以前の旅にあっては光輝いていた熱狂の点火がない。これはイザベラが出版者［ジョン・マレー３世］に書いている通りだった――「私は日本には魂を奪われません。深い興味を覚えさせ、人にまじめな勉強をさせるよう誘いはしますが、景色は単調で、旅の仕方はのんびりとしていて苦難が多く、平坦で色彩が不足しています」。（傍点引用者）（*Letters to Henrietta,* p.205）

チューバックは関西旅行の記述は*Unbeaten Tracks In Japan*にはないとわざわざ付け加えている（傍点部分）。これは明らかに1885年の省略版を指しているのである。このことは、チューバックのこの記述全体に問題をもたらしたと考えられ、実際は、初版（1800）では「飽き飽き」する「退屈な記録」だから書かなかったという関西旅行に北日本の旅行と同じほどのページが割かれているという矛盾をきたす。

イザベラ・バードの日記や手紙を扱った研究者や伝記の著者でさえ*Unbeaten Tracks in Japan*の初版の２巻本の存在に気がつかないか忘れているのである。このことは引用・参考文献として省略版の重版を用いた場合には十分予想されることである。

またＯ・チェックランド［Olive Checkland］（川勝貴美訳［1995］『イザベラ・バードの旅の生涯』日本経済評論社）やパット・バーのイザベラ･バード研究（Pat Barr［1970］, *The Story of Isabella Bird,* Macmillan, John Murray）においても伝道状況の報告、鋭いキリスト教的視点と異教徒への伝

道に対する彼女の迷いと確信の記述が論点となることはなかった[8)]。

さらにイザベラ・バードを引用している本の中には原本と邦訳との間に不整合も見られる。ある訳本の引用に付けられた注の例をそのまま挙げる。

Issabella L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan*（London: John Murray, 1880; reprint, Boston: Beacon Press, 1987［楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳『バード日本紀行』雄松堂出版、二〇〇二年］

初出は1880年の初版で、用いられたのはBeacon Press（省略版を底本とする）となっているが、実は『バード 日本紀行』にはBeacon Press版の記述は、全く含まれていない。同書は省略版で削除された部分のみの邦訳で、ここで引用された北日本の物見高く、好奇心に満ちた人々の記述はこの本にはない。この場合［1880；］以下は次のような表記が必要と思われる。

reprint of John Murray,1885, Boston: Beacon Press,1987［高梨健吉訳（1973）『日本奥地紀行』、平凡社］

英語版ではイザベラ・バードの日本旅行記は２巻本（1880）も１巻本（1885）もそれ以後の全ての版も一貫して***Unbeaten Tracks in Japan***であり他の題名は使われていない。つまり日本よりも欧米諸国での引用に問題が生じていることになる。手にしている本の原本が２巻本なのか１巻本なのかを引用者が知ることは難しいのである。たとえ「John Murray , 1880」と書かれているものでも、併記でタトル版、ヴィラゴウ版などが記されている場合は、省略版のリプリントになる。だが、引用で1885年版のリプリントを用いたという表記はみかけない。

ただ、現在、日本ではこの問題は決着がついているといっていい。高梨健吉訳（1973）『日本奥地紀行』は省略１巻本（1885）の邦訳であることが最初に記されている。

他方、初版からの削除部分は『バード　日本紀行』（楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳［2002］雄松堂出版）、『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』（高畑美代子訳［2008］、中央公論事業出版）の2冊に余すところなく訳出されている。前者は章全体の省略部分で、後者は文中からの削除を対象としていて、両者の間に重複はない。両者ともタトル版や、ヴィラゴウ版、トラベラーズ・テイルズ版などのペーパーバック（普及版）には含まれていない部分の訳である。つまりこれら普及版を用いた時の邦訳表示はいずれも『日本奥地紀行』でなければならない。

また、初版の２巻本全体の邦訳は『イザベラ・バード 日本紀行』（時岡敬子訳［2008］、講談社学術文庫）だけである。

２．各版の違い

１）各版の表紙と扉

表紙の違い（表紙写真；本稿pp.143-4、図１-５）

初版（1880）と省略新版（1885）はともにジョン・マレー社から刊行され、表紙絵はまったく同じ「金色の月に竹」に緑色の地で、一見したところ同一のように見える（本稿p.143、図１、２）。しかし、両者を並べてみると、省略版が少し小さいことに気付く。初版は21×13.3（cm）であるのに対して、省略版は19.5×12.5（cm）とわずかに小さい。

また背表紙には、初版が‘Miss Bird's Japan’「ミス・バードの日本」と記され、イザベラ・バードの観た日本の意が強調されているが、これに対して、省略版では、‘Japan Bird’に変わっている。

図３は、1800年に初版とほぼ同時にニューヨークでファクシミリ版としてパトナムズ・サンズから出版された２巻本である。表紙の絵は山形県上ノ山からの信の挿絵である。この部分の小見出しは「富の神」であり、大黒は庶民の信仰対象として、北日本の旅行中どこにでも見られた。プロテスタント

であるイザベラの立場からは、日本人の偶像崇拝を象徴する非キリスト教文化そのものであった。

図４は、1900年にロンドンにおいて、マレー社からジョージ・ニューンズ社に出版社を替えて出された初版の復活新版である。表紙絵は、初版の第一信の挿絵の題材と同じ富士山であるが、挿絵ほど極端に尖った形をしていない[9)]。「富士山は神聖な山であり、日本人にとっては実になつかしいものであるから、日本の芸術はそれを描いて飽くことがない」と富士山が日本人の精神の支柱となることを踏まえての採用と考えられる。この版の著者名はMrs. Bishop（ビショップ夫人）となっているが、*Unbeaten Tracks in Japan* の中で筆者の知る限り唯一結婚後の名前が使われている版である。

扉

レディ・パークスへの献辞

Unbeaten Tracks in Japan（1880）は前年の1879年11月12日にロンドンのケンジントンの自宅で亡くなったレディ・パークスに捧げられている。駐日英国公使ハリー・パークス卿は無制限通用ともいうべき旅券を発行して、イザベラの「未踏の地」の旅を成功に導き、また同時に*Unbeaten Tracks in Japan*という書名の発案者でもあったが、パークス夫人もまた彼女の旅の協力者であった[10)]。またイザベラの東京での滞在先は信書の出し先からわかるように英国公使館であった[11)]。

夫人への献辞はその後のペーパーバックを含めて、1900年のジョージ・ニューンズ版を除く全ての版に見られる。また、1900年版は献辞がないだけではなく、著者の身分が表記されるなど他の版と扉表記は大きく異なる（本稿p.135に詳細）。

２）版による副題の違い

Unbeaten Tracks in Japan［『日本の未踏路』］という主題（メーン・タイトル）は変わることはなかったが、各版での副題（サブ・タイトル）は幾つかの違いがある。以下に各版とその副題を示した。なお下線部はその版の特徴となっている部分である。

表記順；巻末表番号（普及版を含む各版の特徴を示した。以下記号数字は巻末表番号）、版種、出版年、出版社名、出版地。（巻末表；本稿p.139を参照されたい）

①　初版：1880、John Murray［ジョン・マレー］、London

AN ACCOUNT OF TRAVELS IN THE INTERIOR INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND THE <u>SHRINES OF NIKKÔ AND ISÉ</u>

［奥地旅行記、蝦夷の先住民および日光と伊勢の神宮訪問を含む］

＊ ⑨ 1997、Ganesha Publishing & Edition Synapse［ガネイシャ社］も同じ副題

②　ファクシミリ版：1880、Putnam's sons［パトナムズ・サンズ］、New York

AN ACCOUNT OF TRAVELS <u>ON HORSEBACK</u> IN THE INTERIOR INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND THE <u>SHRINES OF NIKKÔ AND ISÉ</u>

［奥地<u>騎馬</u>旅行記 蝦夷の先住民および<u>日光と伊勢の神宮訪問</u>を含む］

＊アメリカで出版された版にのみ「騎馬」が付け加えられた。

③　省略版：1885、John Murray［ジョン・マレー］、London

AN ACCOUNT OF TRAVELS IN THE INTERIOR INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND THE <u>SHRINE OF NIKKÔ</u>

［奥地旅行記、蝦夷の先住民および日光の神宮訪問を含む］

同副題：⑥Tuttle［タトル］(1983)。「AND ISÉ」が題名から消えているのは、１巻本の改編に当たり２巻本にあった伊勢を含む関西旅行を削除したことによる。

④　新版：1900、George Newnes［ジョージ・ニューンズ］、London
A RECORD OF TRAVELS IN THE INTERIOR, INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND THE SHRINES OF NIKKÔ AND ISÉ.
［奥地旅行の記録、蝦夷の先住民および日光と伊勢の神宮訪問を含む］

＊AN ACCOUNTからA RECORDへと変わった。A RECORDは1900年版のみ。

３）版による異なる紀行の旅行地域

Unbeaten Tracks in Japan は省略版で関西旅行が削除されたため版により旅行地域が異なる。

(1) 北海道から関西までの全旅程

①ジョン・マレー初版(1880)、②パトナムズ・サンズ版(1880)、④ジョージ・ニューンズ版(1900)はそれぞれの副題が示すようにイザベラ・バードの1878年の全旅行地域の記述である。初版の復刻版である⑨ガネイシャ版(1997)も同様、以下の地域が記述対象である。

横浜―東京―日光―福島―新潟―山形―秋田―青森―北海道―東京―京都―奈良―大阪―神戸―津―伊勢―東京（全59信）

(2) 関西旅行を含まないもの

①マレー省略版（1885）は、９月21日付の第43信で函館より帰京、最終信となる12月18日付の第44信[12]は、マレー初版の最終信(巻Ⅱの第59信：江戸 英国公使館より)と同じである。

横浜―東京―日光―福島―新潟―山形―秋田―青森―北海道―東京（全44信）

この旅行地域は初版では第49信までとなる。途中削除された信があるため、同じ旅行地域であるが信番号はずれている。（本稿p.127-132　表２．参照）

⑤Dutton［ダットン］（1916）、⑥Tuttle［タトル］（1973）、⑦Virago［ヴィラゴウ］（1984）、⑧Beacon ＆Virago［ビーコン＆ヴィラゴウ］（1987）、⑩Traveler's Tales［トラベラーズ・テイルズ］（2000）版も同じ。

４）著者の手による'PREFACE'（「まえがき」）の変化――　基本は初版

*Unbeaten Tracks in Japan*の基本的な４種の版にはいずれも「まえがき」がついているが、この４種の版には微妙な違いがある。基本はマレー社の初版で一番長い。つまり以後の版で削除された箇所があるということだ。

以下に示したのは、初版の「まえがき」の終り３節である。初版の「まえがき」をもとにその後どのように彼女がそれを変えていったかをみたものである。「～版の終り」となっているのは、その以後の文が削除されていることを示す。なお、㋐㋑㋒の記号は終わり方の分類のためである。

'PREFACE'（「まえがき」）の終わり３節――

「日本の一般的事項」を扱った終章は、日本政府の好意で提供してくれた事実と公式文書に基づくものである。そこから取った資料を直接読んでみるのも有益である。

挿画は、日本人画家の筆になる三枚を除いて私自身か日本人が撮った写真から版を起こしたものである[13]。

この本が欠陥の多い作品であることは、十分に自覚している。しかし、あえて本書の公刊にふみ切った。たくさんの不備にかかわらず、一四〇〇マイル以上にわたる陸路の旅で、私が見聞したあるがままの日本の事物を描きたい。この誠実な試みを読者が受け入れてくれると思ったからである。（**㋐ジョージ・ニューンズ版［1900］の終り**）

本書の**手紙・著述**を印刷に出してから、最愛のたった一人の妹がこの世を去ってしまった。これらの手紙は、まず最初に彼女に書いたものである。有能かつきめ細かい妹の批評をへて、本書が日の目を見たのである。彼女が私の行動に心から関心をもってくれたことが、私が旅行を続け紀行文をつづる際の大きな励ましとなった。（**㋑マレー省略版［1885年以降の省略版］の終り**）

結論の章は、この大きな悲しみの陰を引きずり、書き直して急いで仕上げた。そのため文体の誤りやいくぶんぶっきらぼうな終わり方になっている点を、読者にお許しを乞いたい。」[14]（**㋒マレー初版［1800］、パトナムズ・サンズ版［1800］の終り**）

各版の‘PREFACE’「まえがき」の終わり方は次の３つ（㋒㋑㋐：長い順）に分類される

㋒　イザベラ・バード自身の手による序文では、1800年版が一番長い。（巻末表①②⑨［いずれもマレー初版を底本とする］）
最終段落には本が印刷に渡った後の1880年６月に亡くなった妹への哀悼の意と心の混乱のなかでこの本の完結をさせなければならなかったことが同年９月の日付で記されているのが他の版と異なる点である。

㋑　1885年の省略版は「…大きな励ましとなった。」［上記引用㋑３段落４行目］で終る。
「結論の章は」以下の、終末を迎えた妹と向き合うという悲しみの中で終章を終えたこと、文章の乱れや言葉の不適切さをわびる部分が削られた。これ以後の省略版［１巻本］（巻末表③⑤⑥⑦⑧⑩）はすべてこの1885年版を受け継いでいる。
また、引用文最初の２行（下線部）がないのは、この部分の内容が省略版で削除されたからである。同様の削除がもう一箇所Preface 第３段落の最後にもある。「たくさんの重要な項目があったが、やむをえず省筆したところもある。その他の点は「日本の一般事項」という章でかんたんに要約しておいた。」[15] という部分が削除されている。つまり内容変更は「まえがき」にも忠実に反映されているのである。

㋐　1900年のジョージ・ニューンズ版は「私が見聞したあるがままの日本の事物を描きたい。この誠実な試みを読者が受け入れてくれると思ったからである。」［上記引用㋐２段落４行目］で終る。
この版では最後の段落が全て削られた。イザベラ自身がその生涯の他の紀行文でも再三言っている「見たままの姿」を描きたいという、「誠実な試み」として、受け取ってほしいという簡潔な終わり方である。

またこの最終段落のはじまりでは、‘these volumes’「著作・作品」[16] が‘my letters’［私の手紙］へと次のように変わった。

‘I am painfully conscious of the defects of **these volumes**, but I venture to present them to the public …（p. x）
‘I am painfully conscious of the defects of **my letters**, but I venture to present them to the public …（p. xi）

副題（図９）の「紀行」から「記録」への変化と合わせて考えると、イザベラが初版出版直後にマレー３世に宛てた手紙に記された「注意深くて正直な仕事の真価がわかってもらえたことを嬉しく思います」[17] という当初から心に秘めていたものが伝わる変更である。

５）「序章」「覚書」「一般事項」の削除

省略版で初版から削除された項目は、'PREFACE'（「まえがき」）の他にあった著者による'INTRODUTORY CHAPTER'（「序章」）、「新潟伝道に関する覚書」、「食品と調理に関する覚書」、「蝦夷に関する覚書」、「東京に関する覚書」、「伊勢神宮に関する覚書」、「日本の一般的事項」である。すなわち全ての「覚書」の類を削除したのである。

しかし、この削除中の「日本の一般的事項」は出版直後の旅行記の評価について記したイザベラの手紙によって、力を入れて書いたことが察せられる――

> 私に『コンテンポラリー・レビュー』をお送りくださってありがとうございます。私はR・アロック卿の私の本に対する好意的な意見をなにより大切にします。特に私の最終章（「日本の一般的事項」）への彼の高い評価がそうですが、それは私にかなり大変な仕事を課し、３度も書き直したのです[18]。（括弧内筆者）

彼女が最終章に注いだこのような思い入れは、先の「手紙」への変更と合わせて考えると20年の時を経ての初版の２巻本内容復活への要因のひとつとも考えられる。

Ⅱ　各版の特徴

１．初版（２巻本）――1880, John Murray, London（以下マレー初版）

初版は1880年10月に、イザベラの単行本の出版を手がけていたロンドンのマレー社から２巻本として出版された。第１刷は4,000部刷られた。これはこの本以前に同社から出された *The Englishwoman in America*（不明）、*Six Months in the Sandwich Island*（1,250部）、*A Lady's Life in the Rocky Mountains*（2,000部）[19] に比較して多かったのは、出版者であるジョン・マレー３世のこの本は売れるという予測によるものであったが、予測にたがわず年内には３刷が出るほどの人気だった。この版では、１巻本にはない序章および東京・蝦夷・新潟などの覚書とハリー・パークス卿から送られてきた貿易統計などが含まれている。覚書を除く本文全体は妹に宛てた手紙の形をとる[20]。以下に全体の構成を示した。各信の項目詳細は表２（pp.127-132）を参照されたい。

全体の構成

第Ⅰ巻：398ページ、挿絵22枚（含む地図）、巻末に日本地図

・第１信～第８信まで――横浜・東京
　日本の第一印象、横浜・築地居留地の状況、浅草の寺院、奥地旅行準備。
・第９信～第18信――日光（栃木県）から福島県（現新潟県）津川まで
　東京を出発、日光滞在を経て、新潟を目指して会津西街道の旅
・「新潟伝道に関する覚書」・第19信～第21信（完）および「食品と調理に関する覚書」
　新潟の英国伝道協会の伝道とパーム伝道病院（エディンバラ医療伝道会）、新潟の記述
・第22信～第37信
　新潟を出て、山形―秋田―青森―函館到着まで

貧しい農村の人々の暮らしと殖産興業であった絹織物工場、新しい時代の来訪を告げる病院、師範学校などの記述

第Ⅱ巻：383ページ、挿絵21枚（内アイヌに関するもの13枚）

・「蝦夷に関する覚書」

・第38信と39信

函館居留地の状況、病院・刑務所や駒ケ岳への遠足、キリスト教伝道、仏教伝道

・第40信～第46信

アイヌに関する記述。これは英国で高く評価された部分である。

・第48信と第49信

函館に戻ってからの記述、日本の手紙の形式

・「東京に関する覚書」・「同（結び）」・第50信

東京に関する記述、工部学校、森有礼主催のパーティに出席したことなど

・第51信～第58信

神戸―大阪―京都―伊勢神宮―津―京都

神戸居留地、開市である大阪でのキリスト教伝道状況、さらに京都カレッジ（同志社）と新島襄・八重夫妻についての紹介がある。また仏教（門徒宗）に関する記述もみられ、第57信の後には「伊勢神宮に関する覚書」が入っている。

第59信で東京に戻り、横浜港から上海に向けて日本を去る。

・「日本の一般的事項」と「付録」[21] ――アイヌ語、歳入歳出表（日本で最初の）、対英貿易統計

第Ⅰ巻は文明開化下の東京・横浜から北海道の函館到着までの記載で、近代化の進捗状況と古い日本が混在する形になっている。東北各地でも中央集権化が進み学校・病院・裁判所などが設置されて統治システムが日々改変されていく地方の文明開化の状況が記される一方、他方で迷信深く、慣習の下に貧しく生きる変わらぬ人々の生活が記載されている。

第Ⅱ巻では、開港場である函館の近代化とアイヌの人々の生活に続いて近代化が進む関西の居留地のキリスト教伝道のあり方と人々の考え方、京都での寺院訪問と新島襄の同志社訪問など文明開化と因襲の下にある古い日本がともに記されているのが初版の２巻本の特徴である。

出版時の状況

初版出版の前に、イザベラ・バードにとって大切な人が相次いで亡くなった。その一人は日本で世話になり友情を深めていたレディ・パークスの1979年11月の急死である。*Unbeaten Tracks in Japan* はレディ・パークスの霊に捧げられた。（本稿pp.120、144、図８参照）

もうひとりは彼女の手紙の受け手であり、両親の死後（父エドワード1858年没、母ドーラ1866年没）唯一の家族であった妹ヘンリエッタである。ヘンリエッタが亡くなったのは1880年６月であるが、出版社に原稿を渡した後（発行は10月）で亡くなった妹への哀悼の言葉が急きょ付け加えられたことが分かる記述がある（本稿p.122「まえがき」の㋑．部分）。

２．ファクシミリ版（２巻本）――1880, G. P. Putnam's Sons,　N.Y., USA
（以下パトナムズ・サンズ版、1900年版）

この版は、初版と同じ1880年にニューヨークのパトナムズ・サンズからファクシミリ版として出された。初版と同様に1881年の夏には第４版が出るほどの人気だった。表紙には、初版の挿絵（vol. Ⅰ,

p.265）のひとつ大黒（Daikoku）が用いられている（図３）。内容構成および「まえがき」（出版時の状況は上述の初版と同じ）、挿絵数は初版と全く同じで、新しい日本と古い日本が併記されていることに変わりはないが、この版には、他と異なる大きな特徴が２つある。

１）副題で騎馬旅行を明示

副題がTRAVELS ON HORSEBACK IN INTERIOR（以下は①と同じ）となっていて、新たに「騎乗」の部分が付け加えられたことが他の版と異なる。‘ON HORSEBACK’はパトナムズ・サンズ版にのみ見られる特徴である。アメリカの読者に対して、騎馬による『ロッキー山脈紀行』を想起させるものである。ハワイ、ロッキー紀行から続く騎馬旅行のシリーズの狙いがあったと考えられる。

２）手紙番号が消えて各信に見出しが付けられたパトナムズ・サンズ版

この版のみはFirst Impression , Japanese Doctorなどのように内容を示す「見出し」（表１）が付けられていて、他のすべての版が手紙形式（例：Letter Ⅰ）になっているのとは異なっている。

また、マレー版の柱（本のページ上の表示）と比較すると表記に修飾語が少なく簡潔である。しかし他方で（アイヌについての）ミッシング・リンクのような衝撃的な見出しも見られる。以下に初版の各信とパトナムズ・サンズ版の見出しを対応させたものを示した。

表１．Putnam’s Sons版の各信のテーマが分かる見出し（初版の信番号⇔ニューヨーク版の見出し）

第１巻の小見出し				
１信⇔第一印象 ２信⇔古さと新しさ ３信⇔江戸 ４信⇔習慣と服装 ５信⇔寺 ６信⇔中国人と召使 ７信⇔芝居 ８信⇔参拝 ９信⇔旅の始まり ９信（続）⇔粕壁から日光	10信⇔金谷さんの家 11信⇔日光 12信⇔地元の湯治場 13信⇔家庭生活 13信（続）⇔夕べの娯楽 13信（完）⇔買い物 14信⇔貧弱な着物 15信⇔不潔さと病気 15信（続）⇔高地の農業 16信⇔マラリア流行の地	17信⇔ひどい不潔さ 18信⇔川渡りの旅 「新潟に関する覚書」⇔伝道 19信⇔仏教 20信⇔新潟 21信⇔店屋 21信（続）⇔粗悪な混ぜもの 「食品と調理に関する覚書」⇔食べ物 22信⇔いやな気分	23信⇔裕福な地域 24信⇔日本の医者 25信⇔恐ろしい病気 25信（続）⇔葬式 25信（完）⇔警察官 26信⇔病院を訪ねる 27信⇔警察の力 28信⇔藤の美点と欠点 29信⇔結婚式 30信⇔休日	31信⇔やっとの逃避 32信⇔白沢 33信⇔大水 33信（続）⇔子供の遊び 34信⇔七夕 35信⇔はびこる迷信 36信⇔原始的な素朴さ 37信⇔旅の終り
第２巻の小見出し				
「蝦夷に関する覚書」⇔蝦夷 38信⇔宣教活動 39 信⇔函館 40 信⇔景観の変化 40 信（続）⇔会合 41 信⇔アイヌと生活 41信（続）⇔アイヌのもてなし 42信⇔未開の生活	42信（続）⇔衣服と慣習 42信（続）⇔アイヌの宗教 43信⇔ほろ酔い気分 44信⇔火山を見に行く 44信（続）⇔雨にぬれながら旅行 45信⇔驚き 45信（続）⇔閑静	46信⇔ミッシング・リンク 47信⇔日本の進歩 48信⇔敬意 49信⇔台風 「東京に関する覚書」⇔「東京に関する覚書」 「東京に関する覚書」（続）⇔近代的制度	50信⇔日本のコンサート 51信⇔伝道拠点 52信⇔京都カレッジ 53信⇔門徒宗 54信⇔芸術的嗜好 55信⇔宇治 「伊勢神宮に関する覚書」⇔伊勢神宮	56信⇔もう一つの巡礼 57信⇔琵琶湖 58信⇔キリスト教の行く末 59信⇔火葬 日本の一般的事項⇔日本の一般的事項 付録⇔付録

３．省略新版（１巻本）――1885, John Murray, London（以下省略版または1885年版）

1885年には、省略新版が初版と同じマレー社から出版された。日本で広く読まれてきた高梨健吉訳『日本奥地紀行』の原本であり、その後の各種ペーパーバックの底本となった。

この版では伊勢を含む関西旅行部分および全覚書、付録の完全削除と東北・北海道を含む全域の部分削除が行われた。挿絵は本文削除に伴い３枚減って40枚となった。形式は初版と同じく妹宛の書簡体で、残された部分の構成と小見出しは初版と同じである。装丁は初版と全く同一でわずかに版が小さいが、並べてみないと気がつかないくらいの差である（図１、図２）。

また、他の３版（初版［1880］、パトナムズ・サンズ版［1880］、新版［1900］）と大きく異なるのは、初版の記述内容の半分以上が削除されて、それまでの２巻本から１巻本に変わったことである。すな

わち、著者生前の改訂出版ではこれが唯一の省略版であり、変更・削除はいずれも削除に伴うものである。よってここでは削除についてのみの言及となる。

１）削除の目的と概要

省略版の第一刷（1885）の扉には*NEW EDITION, ABRIDGED*と明記されている（本稿p.144、図６、７）が、この文字は第一刷にのみ見られ、その後は記されなかったことによる混乱は先述の通りである（本稿pp.117-119）。

大幅に削除されたこの普及版の出版について、長谷川誠一はブラキストン（T. W. Blakiston）の批判に対応したものであるとの指摘をし、金坂清則、楠家重敏はこれについて論じている[22)]。

しかし、ジョン･マレーはこのような廉価本の出版をイザベラ･バードと共に進めただけではなくあのダーウィン[23)]にも薦めて出版し、また、『ハワイ紀行』においても重複部分の削除をしているのであり、批判が原因で削除したとは必ずしも考えられない。

筆者は初版と削除版の詳細を比較して検討したが、結果は削除部分について、ブラキストンらの批判による部分は削除された部分とそのまま残された部分があり、削除に批判に対する一貫性は見られなかった[24)]。

楠家（2002）は、イザベラとジョン･マレーが交わした手紙の中に、この間の出版事情をしめす資料があり、「1879年10月24日付けのバードの手紙には、以前売り出した『ロッキー山脈踏破行』の格安版のようなものを日本滞在記の場合にも出したい、とある。初版刊行直前にも、出版社とバードは普及版の出版を考えていたのである」[25)]と省略版の計画はもともとあったことを指摘している。

ストッダートは彼女のこの省略版の作業について次のように言っている――

> 彼女は休暇中であったが、マレー氏が彼女に準備するように頼んでいた新版のために、『日本の未踏路』から統計を取り去り旅行と冒険の本として作り圧縮１巻本にするために忙しかった。彼女はこれを10月１日までに終えた[26)]。

つまりこの新版の目的は堅苦しい日本研究部分を削除して「旅行と冒険の本」を作ることを目的としていたのだった。

表２に削除の概要がわかるように初版（２巻本）からの省略版（１巻本）における削除部分を対照して示した。

・信書の番号はそれぞれの版につけられた番号をそのまま用いた。

・省略版の内容表示は高梨健吉訳（1973）『日本奥地紀行』（平凡社、2000）の目次をそのまま使った。

・**太明朝文字**は削除を示す。

・初版の削除部分で**信書番号**が太ゴシック文字網掛けになっている内容表示は楠家重敏・橋本かほる・宮崎路子訳（2002）『バード 日本紀行』（雄松堂出版）。

・初版の内容その他の削除部分は**太ゴシック文字**に網掛けで示し、また項目が残っているがその一部が削除されている項目は細ゴシック文字（下線付き）で示した。内容表示は高畑美代子訳・解説（2008）『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』、中央公論事業出版。

・初版の［**太ゴシック文字**］は、一部が削除された項目に内容を示すために便宜的に筆者がつけた項目。

表２．初版（1880、２巻本）からの省略版（1885、１巻本）の削除部分を示す対照表

初版（1880、２巻本）		省略版（1885、１巻本） *NEW EDITION , ABRIDGED*（省略版の初版のみ）	
手紙番号	内　　容	手紙番号	内　　容
はしがき 序章	はしがき序章	はしがき 削除	はしがき削除
第１信	初めて見る日本、富士山の姿、日本の小船、**雑種の街**、人力車、見苦しい乗車、紙幣、日本旅行の欠点	第一信	初めて見る日本、富士山の姿、日本の小船人力車、見苦しい乗車、紙幣、日本旅行の欠点
第２信	サー・ハリー・パークス、「大使の乗り物」、**にじんだ文字**、車引き、**諸外国の意見を考慮した譲歩**、**諸規則**	第二信	サー・ハリー・パークス、「大使の乗り物」、車引き
第３信	江戸と東京、横浜鉄道、似合わぬ洋服、関東平野、風変わりな姿、東京の第一印象、英国公使館、英国人の家庭	第三信	江戸と東京、横浜鉄道、似合わぬ洋服、関東平野、風変わりな姿、東京の第一印象、英国公使館、英国人の家庭
第４信	**けだるい暑さ、東京の街路風景、外国人居留地、キリスト教地区、俗悪な建築、吹上御苑、服装とふるまい、ぎこちない女性**	削　除	削　除
第５信	**狭いわだち、話題、つがいのポニー、芝の寺院、「アフターヌーン・ティー」、英国国教会**	削　除	削　除
第６信	**ヘボン博士**、**横浜の山の手**、中国人、**中国人の買弁**（ばいべん）、召使を雇う、伊藤の第一印象、厳粛な契約、食物の問題	第四信	中国人、召使を雇う、伊藤の第一印象、厳粛な契約、食物の問題
第７信	**演劇の改良、古代演劇、近代的演劇、舞台、改良劇場の柿落**（こけらおとし）**、役者達、開演の辞、道徳改良、いらいらする騒音、喜劇的牧歌**	削　除	削　除
第８信	浅草観音、寺院建築の均一性、人力車の旅、年中祭り、仁王［**浅草寺の開祖**］、**冥土のはかなさ**、異教徒の祈り、びんずる、**キツネが神さま（お稲荷さま）**、鬼たち、**花卉の畸形**、**日本の女性**、矢場、新しい日本、貴婦人	第五信	浅草観音、寺院建築の均一性、人力車の旅、年中祭り、仁王、異教徒の祈り、びんずる、鬼たち、矢場、新しい日本、貴婦人
第９信	心配、旅の仕度、旅券、車夫の服装、江戸の実景、田［**稲作**］、茶屋、旅人の接待、粕壁の宿屋、私的生活の欠如、騒がしい群集、夜の心配、警官の姿、江戸からの便り	第六信	心配、旅の仕度、旅券、車夫の服装、江戸の実景、田、茶屋、旅人の接待、粕壁の宿屋、私的生活の欠如、騒がしい群集、夜の心配、警官の姿、江戸からの便り
第９信 （続き）	車夫病気となる、農夫の服装、種々の稲こき、栃木の宿屋、農村、美しい地方、記念の並木道、人形の町、日光、旅路の果て、車夫の親切心	第六信 （続）	車夫病気となる、農夫の服装、種々の稲こき、栃木の宿屋、農村、美しい地方、記念の並木道、人形の町、日光、旅路の果て、車夫の親切心
第10信	日本の田園風景、音楽的静けさ、私の部屋、花の装飾、金谷とその一家、食卓の器具	第七信	日本の田園風景、音楽的静けさ、［私の部屋］、花の装飾、金谷とその一家、食卓の器具
第11信	日光の美しさ、家康の埋葬、大神社の入口、陽明門、豪華な装飾、霊廟の簡素さ、家光の社、日本とインドの宗教芸術、地震、木彫りの美しさ	第八信	日光の美しさ、家康の埋葬、大神社の入口、陽明門、豪華な装飾、霊廟の簡素さ、家光の社、日本とインドの宗教芸術、地震、木彫りの美しさ
第12信	日本の駄馬と荷鞍、**中善寺への山道**、**さびれた村**、**巡礼の季節**、**薔薇色のツツジ**、宿屋と女中、土地の湯治場、硫黄泉、上前をはねる、**歓迎される到着**	第九信	日本の駄馬と荷鞍、宿屋と女中、土地の湯治場、硫黄泉、上前をはねる

第13信	静かな単調さ、日本の学校、憂鬱な小歌曲、罰、子どものパーティ、美しい女の子、女の名前、子どもの芝居、針仕事、書道、生け花、金谷、毎日の仕事、晩の娯楽、旅程計画、神棚	第十信	静かな単調さ、日本の学校、憂鬱な小歌曲、罰、子どものパーティ、美しい女の子、女の名前、子どもの芝居、針仕事、書道、生け花、金谷、毎日の仕事、晩の娯楽、旅程計画、神棚
第13信（続き）	見える暗やみ、日光の商店、少女と婦人、夜と睡眠、親の愛、子どものおとなしさ、髪結い、皮膚病、**モグサ**、**針治療**	第十信（続）	見える暗やみ、日光の商店、少女と婦人、夜と睡眠、親の愛、子どものおとなしさ、髪結い、皮膚病
第13信（完）	商店と買い物、**会計**、床屋、油紙、伊藤の虚栄心、**大黒信仰**、旅行の準備、輸送と値段、金銭と度量法	第十信（完）	商店と買い物、床屋、油紙、伊藤の虚栄心、旅行の準備、輸送と値段、金銭と度量法
第14信	安楽な生活去る、美しい景色、驚き、農家、珍しい服装、馬に勒をつける、女性の着物と醜さ、赤ん坊、私の馬子、鬼怒川の美しさ、**仏教の墓地**、私の召使、藤原、馬の草履、ばかばかしい間違い	第十一信	安楽な生活去る、美しい景色、驚き、農家、珍しい服装、馬に勒をつける、女性の着物と醜さ、赤ん坊、私の馬子、鬼怒川の美しさ、藤原、私の召使、馬の草履、ばかばかしい間違い
第15信	奇妙なごったまぜ, 貧乏人の子沢山, 分水界, さらにひどく, 米作人の休日、病気の群集、素人医者、**風呂**、清潔の欠如、**不衛生な家々**、早喰い、早老	第十二信	奇妙なごったまぜ, 貧乏人の子沢山, 分水界, さらにひどく, 米作人の休日、病気の群集、素人医者、清潔の欠如、早喰い、早老
第15信（完）	日本の渡し場、**藤の仲間**、**穀物**、**漢方薬**、**耕作のきまり**、波形の道路、山王峠、種々の草木、興味のない藪、男性優位、**自然信仰の神社**、**宗教のあきらかな衰退**	第十二信（完）	日本の渡し場、波形の道路、山王峠、種々の草木、興味のない藪、男性優位
第16信	若松平野、**御神木**、軽い服装、高田の群集、**和紙**、学校教師の会議、群集の臆病さ、悪い道路、悪質の馬、山の景色、美しい宿屋、魚の骨をのみこむ、貧困と自殺、宿の台所、知られざるイギリス、私の朝食が消える	第十三信	若松平野、軽い服装、高田の群集、学校教師の会議、群集の臆病さ、悪い道路、悪質の馬、山の景色、美しい宿屋、魚の骨をのみこむ、貧困と自殺、宿の台所、知られざるイギリス、私の朝食が消える
第17信	ひどい道路、単調な緑色の草木、底知れぬ汚さ、低級な生活、**漆の木**、**漆かぶれ**、**蝋の木と蝋燭**、津川の宿屋、礼儀正しさ、積み出しの港、「蕃鬼」	第十四信	ひどい道路、単調な緑色の草木、底知れぬ汚さ、低級な生活、津川の宿屋、礼儀正しさ、積み出しの港、「蕃鬼」
第18信	急ぎ、津川の荷物船、急流を下る、奇想天外の景色き、河上の生活、葡萄園、大麦を乾かす、夏の静けさ、新潟の郊外、教会伝道本部	第十五信	急ぎ、津川の荷物船、急流を下る、奇想天外の景色き、河上の生活、葡萄園、大麦を乾かす、夏の静けさ、新潟の郊外、教会伝道本部
新潟伝道に関する覚書	**キリスト教伝道、伝道拠点としての新潟、二人の宣教師、三年にわたる布教の成果、日々の説教、医療伝道、病院、日本における宣教師の苦労**	削　除	削　除
第19信	**寺町通り、寺の内部、仏教とカトリックの儀式における類似点、評判の説教師、涅槃（ねはん）、穏やかな仏教、「永遠の生命」を嫌う日本人、キリスト教の前途を阻む新たな障害**	削　除	削　除
第20信	いやな天気、人を悩ます虫、外国貿易のない港、頑固な川、進歩、日本の都市、水路、新潟の庭園、ルース・ファイソン、冬の気候、綿入れの青物を着た住民	第十六信	いやな天気、人を悩ます虫、外国貿易のない港、頑固な川、進歩、日本の都市、水路、新潟の庭園、ルース・ファイソン、冬の気候、綿入れの青物を着た住民
第21信	**みすぼらしい町、並骨董屋、理想的な桶、簪（かんざし）、堆朱（ついしゅ）、彫像、仏具、まがいもの、書籍販売業者の店、女子向けの本、用意周到な家庭教育、著作権、本の製本、提灯、青の染め付け陶器、いかさま薬、批判**	削　除	削　除
第21信（完）	**買い物術の不条理、悲哀と喜び、コンデンスミルク、レモン、水、コーヒーエキス、恥知らずなペテン、バラ印歯磨き粉、伊藤、旅行中の食糧**	削　除	削　除

食品と調理に関する覚書	**魚と醤油、鳥獣肉の食し方、豊富な野菜類、大根、風味に欠ける果物、ケーキと砂糖菓子、清潔で手際のよい調理法、調理器具、生体解剖（魚の活作り）、汁物、正式のおもてなし、飲み物、貧民の食事**	削　除	削　除
第22信	新潟の運河、ひどい淋しさ、礼儀正しさ、バーム博士の二人引き入力事、[**仏教に浸る新潟の中条**]、騒々しいお祭り、がたがた揺られる旅、山村、冬の陰気さ、陸の孤島、多人数の同居、牛に乗る、泥酔の女、やむなく休息、道を知らない村人、重い荷物、乞食がいない、のろのろした旅行	第十七信	新潟の運河、ひどい淋しさ、礼儀正しさ、バーム樽士の二人引き入力事（９行削除）、騒々しいお祭り、がたがた揺られる旅、山村、冬の陰気さ、陸の孤島、多人数の同居、牛に乗る、泥酔の女、やむなく休息、道を知らない村人、重い荷物、乞食がいない、のろのろした旅行
第23信	美しい牝牛、外国の風習に対する日本人の批評、楽しい休憩、新たなる親切、米沢平野、奇妙な間違い、母の追悼、**死者の国の判定（閻魔）**、小松に到着、堂々たる宿舎、**言論の自由の範囲**、**絹糸と養蚕**、性悪の馬、アジアの楽園、一流の温泉場、美人、土蔵、**富の神（大黒）**	第十八信	美しい牝牛、外国の風習に対する日本人の批評、楽しい休憩、新たなる親切、米沢平野、奇妙な間違い、母の追悼、小松に到着、堂々たる宿舎、性悪の馬、アジアの楽園、一流の温泉場、美人、土蔵（23行中後ろ20行削除）
第24信	繁栄、囚人労働、新しい橋、山形、にせ酒、政府の建物、不作法、**製糸工場**、雪の山々、あわれな町、[**医師資格**[1]]、[**喫煙**]、[**農村統治**]	第十九信	繁栄、囚人労働、新しい橋（38行中30行削除）、山形、にせ酒、政府の建物、不作法、雪の山々、あわれな町（終り５ページ半の削除[27]）
第25信	鶏肉の効果、まずしい食事、のろい旅、**石の縄（蛇籠、竹蛇籠）**、興味あるもの、脚気、**発病原因**、命を奪う病、大火、安全な蔵	第二十信	鶏肉の効果、まずしい食事、のろい旅、興味あるもの、脚気、命を奪う病、大火、安全な蔵
第25信（続き）	公衆の面前で食事、奇怪な出来事、警察の訊問、男か女か、憂鬱な目つき、悪性の馬、不運な町、失望、鳥居、[**葬式**]	第二十信（続き）	公衆の面前で食事、奇怪な出来事、警察の訊問、男か女か、憂鬱な目つき、悪性の馬、不運な町、失望、鳥居
第25信（完）ママ	思いがけない招待、ばかげた事件、警官の礼儀正しさ、慰めのない日曜日、無法な侵入、じっと見る特権	第二十信（続き）ママ	思いがけない招待、ばかげた事件、警官の礼儀正しさ、慰めのない日曜日、無法な侵入、じっと見る特権
第26信	断行の必要、誤報に迷う、川を下る、郊外の住宅、久保田病院、公式の歓迎、**悪い看護**、**防腐剤の取扱い**、**整頓された薬局**、[医**師資格**[2]]、師範学校、**対立と不調和**	第二十一信	断行の必要、誤報に迷う、川を下る、郊外の住宅、久保田病院、公式の歓迎、師範学校
第27信	絹織工場、女性の仕事、警官の護衛、日本の警察、**城跡**、**弁護士の増加**	第二十二信	絹織工場、女性の仕事、警官の護衛、日本の警察
第28信	長雨、信頼できる召使い、伊藤の日記、伊藤の優秀性、伊藤の欠点、日本の将来の予言、奇妙な質問、極上の英語、経済的な旅行、またも日本の駄馬	第二十三信	長雨、信頼できる召使い、伊藤の日記、伊藤の優秀性、伊藤の欠点、日本の将来の予言、奇妙な質問、極上の英語、経済的な旅行、またも日本の駄馬
第29信	海草による象徴、午後の訪問者、神童、書道の神業、子ども崇拝、**日本の印章（花押）**、借り着、**婚礼**、花嫁衣装、家具、[**結婚は民事契約**]、結婚式、**妻の地位**、**女性の道徳律**	第二十四信	海草による象徴、午後の訪問者、神童、書道の神業、子ども崇拝、借り着、花嫁衣装、家具、結婚式
第30信	休日の光景、祭り、お祭り騒ぎの魅力、祭りの山車、神と悪魔、活人画、港の可能性、村の鍛冶屋、酒醸造業の繁栄、**日本への酒の伝来**、**酒税**、大きな見もの	第二十五信	休日の光景、祭り、お祭り騒ぎの魅力、祭りの山車、神と悪魔、港の可能性、村の鍛冶屋、酒醸造業の繁栄、大きな見もの
第31信	旅の疲れ、奔流と泥、伊藤の不機嫌、接摩、**目の不自由な人たちの職業組合**、猿回しと見られる、渡し場の不通、困難な通行、米代川の危険、船頭溺れる、夜の騒ぎ、[**子どもの教育**] うるきい宿屋、嵐に閉じこめられた旅人たち、ハイ!ハイ! またも夜の騒ぎ、[**大館**]	第二十六信	旅の疲れ、奔流と泥、伊藤の不機嫌、接摩、猿回しと見られる、渡し場の不通、困難な通行、米代川の危険、船頭溺れる、夜の騒ぎ、うるきい宿屋、嵐に閉じこめられた旅人たち、ハイ!ハイ! またも夜の騒ぎ

第32信	上機嫌な酩酊、日光の効果、くだらない論争、**悩まされる支配力**、**外国人の要求**、**村にあるもの**、**日本の均一性**、晩の仕事、騒がしい談話、社交的集まり、不公平な比較	第二十七信	上機嫌な酩酊、日光の効果、くだらない論争、晩の仕事、騒がしい談話、社交的集まり、不公平な比較
第33信	滝のような雨、不愉快な抑留、洪水による惨害、矢立峠、水の力、困難増す、原始的な宿屋、川の増水	第二十八信	滝のような雨、不愉快な抑留、洪水による惨害、矢立峠、水の力、困難増す、原始的な宿屋、川の増水
第33信（続き）	乏しい気晴らし、日本の子ども、子どもの遊戯、賢明な例、風上げ競争、**カルタ**、**伝染した笑い**、**一般的な諺**（ことわざ）、個人的な窮乏	第二十八信（続き）	乏しい気晴らし、日本の子ども、子どもの遊戯、賢明な例、風上げ競争、個人的な窮乏
第34信	希望を延期、洪水の影響、警察の活動、変装して散歩、七夕祭り［**織姫**］、サトウ氏の評判、**織姫**	第二十九信	希望を延期、洪水の影響、警察の活動、変装して散歩、七夕祭り、サトウ氏の評判
第35信	婦人の化粧、髪結い、白粉と化粧品、午後の訪問客、キリスト教信者、［**クリスチャン学生**］、**流布している迷信**、**生霊と幽霊**、**夢による前兆**、**愛と復讐**	第三十信	婦人の化粧、髪結い、白粉と化粧品、午後の訪問客、キリスト教信者
第36信	旅先の珍しさ、粗末な住居、原始的な素朴さ、公衆の風呂、**厳粛な疑問**、**少ないムチ打ち**、**揺らぐ希望**	第三十一信	旅先の珍しさ、粗末な住居、原始的な素朴さ、公衆の風呂
第37信	つらい一日の旅、落馬、海に近づく、楽しい興奮、一面の灰色、あいにくの警官、嵐の航海、熱狂的歓迎、風の中の上陸、旅路の終わり	第三十二信	つらい一日の旅、落馬、海に近づく、楽しい興奮、一面の灰色、あいにくの警官、嵐の航海、熱狂的歓迎、風の中の上陸、旅路の終わり。
初版　(1880)第二巻		省略版　(1885)　続き	
蝦夷に関する覚書	**地形的特徴**、**開拓使**、**新しい中心地**、**漁業**、**函館怠りない警察**、**「毛むくじゃらのアイヌ」**、**蝦夷の魅力**	削　除	削　除
第38信	風光、風の都、奇異な屋根の波、**社会的退屈**、**伝道拠点**、**無秩序なミサ**、**日々の説教**、**仏教寺院**、**仏教の説法**	第三十三信	風光、風の都、奇異な屋根の波
第39信	伊藤の非行、「宣教師式」、失敗の予言、**日本の医者**、**函館病院**、**刑務所**、**刑務所の快適さ**、**菊の栽培**、**盆祭り**、**祝日の大群衆**	第三十四信	伊藤の非行、「宣教師式」、失敗の予言
第40信	美しい夕日、役所の証文、「先頭馬」、日本人の親切、**定着した娯楽**［**碁**］、連絡船、車夫の逃亡、未開人の車夫、馬の群れ、草花の美しさ、未踏の地、うす気味悪い住居、孤独と気味悪さ	第三十五信	美しい夕日、役所の証文、「先頭馬」、日本人の親切連絡船、車夫の逃亡、未開人の車夫、馬の群れ、草花の美しさ、未踏の地、うす気味悪い住居、孤独と気味悪さ
第40信（続き）	大自然の調和、良い馬、ただ一つの不調和、森林、アイヌの船頭［**アイヌの人口**］、「蚤だよ、蚤！」、当惑した探検家たち、伊藤のアイヌ人軽蔑、アイヌ人へ紹介	第三十五信（続き）	大自然の調和、良い馬、ただ一つの不調和、森林、アイヌの船頭、「蚤だよ、蚤！」、当惑した探検家たち、伊藤のアイヌ人軽蔑、アイヌ人へ紹介
第41信	未開人の生活、森の道、清潔な村、ねんごろなもてなし、酋長の母、夕食、未開人の集い、神酒、夜の静けさ、アイヌ人の礼儀正しさ、酋長の妻	第三十六信	未開人の生活、森の道、清潔な村、ねんごろなもてなし、酋長の母、夕食、未開人の集い、神酒、夜の静けさ、アイヌ人の礼儀正しさ、酋長の妻
第41信（続き）	礼拝と誤解される、親の愛情、朝の訪問、みじめな耕作、正直と寛大、丸木舟、女性の仕事、「運命の女神」の老婆、新しい到着者、危ない処方薬、義経神社、酋長の帰り	第三十六信（続き）	礼拝と誤解される、親の愛情、朝の訪問、みじめな耕作、正直と寛大、丸木舟、女性の仕事、「運命の女神」の老婆、新しい到着者、危ない処方薬、義経神社、酋長の帰り
第42信	未開人の生活の味気なさ、どうにもならぬ未開人たち、アイヌ人の体格、女性の美しさ、苦痛と装飾、子どもの生活、従順と服従	第三十七信	未開人の生活の味気なさ、どうにもならぬ未開人たち、アイヌ人の体格、女性の美しさ、苦痛と装飾、子どもの生活、従順と服従

第42信（続き）	アイヌの衣服、晴れ着、家屋の建築、家庭の神々、日本の骨董品、生活必需品、泥の汁、毒矢、仕掛け矢、女の仕事、樹皮製の衣服、織物の技術	第三十七信（続き）	アイヌの衣服、晴れ着、家屋の建築、家庭の神々、日本の骨董品、生活必需品、泥の汁、毒矢、仕掛け矢、女の仕事、樹皮製の衣服、織物の技術
第42信（続き）	素朴な自然崇拝、アイヌの神々、祭りの歌、宗教的酩酊、熊崇拝、毎年の熊祭り、アイヌの将来、結婚と離婚、楽器、作法、酋長の職、死と埋葬、老齢、道徳	第三十七信（続き）	素朴な自然崇拝、アイヌの神々、祭りの歌、宗教的酩酊、熊崇拝、毎年の熊祭り、アイヌの将来、結婚と離婚、楽器、作法、酋長の職、死と埋葬、老齢、道徳
第43信	別れの贈り物、珍味、寛大さ、海辺の村、ピピチャリの忠告、酔っ払い、伊藤の予言、村長(戸長)の病気、売薬	第三十八信	別れの贈り物、珍味、寛大さ、海辺の村、ピピチャリの忠告、酔っ払い、伊藤の予言、村長の病気、売薬
第44信	歓迎の贈り物、最近の変化、火山現象、興味深い石灰華の円錐山、**侵略的なつる植物**、あやうく絞め殺されそうになる、熊の落とし穴に落ちる、白老のアイヌ人、残酷な調教	第三十九信	歓迎の贈り物、最近の変化、火山現象、興味深い石灰華の円錐山、あやうく絞め殺されそうになる、熊の落とし穴に落ちる、白老のアイヌ人、残酷な調教
第44信（続き）	世界共通の言葉、北海道の家畜柵囲い、台風の雨、困難な道、羨むにたりない騎馬旅行、着物を乾かす、女の後悔	第三十九信（続き）	世界共通の言葉、北海道の家畜柵囲い、台風の雨、困難な道、羨むにたりない騎馬旅行、着物を乾かす、女の後悔
第45信	平穏以上のもの、地理調査の困難、有珠岳、**庭園地帯**、長流川を泳ぐ、美しい夢の国、夕陽の効果、夜の驚き、海岸アイヌ	第四十信	平穏以上のもの、地理調査の困難、有珠岳、長流川を泳ぐ、美しい夢の国、夕陽の効果、夜の驚き、海岸アイヌ
第45信（続き）	海岸、毛深いアイヌ人、馬の喧嘩、北海道の馬、ひどい山路、ちょっとした事件、すばらしい景色、白茶けた休憩地、微臭い部屋、良い育ちのアイヌ人	第四十信（続き）	海岸、毛深いアイヌ人、馬の喧嘩、北海道の馬、ひどい山路、ちょっとした事件、すばらしい景色、白茶けた休憩地、微臭い部屋、良い育ちのアイヌ人
第46信	父親たちの集団、礼文華のアイヌたち、銀杏、一家の人々、猿人[28]、長万部、無秩序な馬たち、ユーラップ川、海岸、**利口なカラス**、**犬を出し抜く**、アイヌの丸木舟、**駒ヶ岳火山**、最後の朝、人を避けるヨーロッパ人	第四十一信	父親たちの集団、礼文華のアイヌたち銀杏、一家の人々、猿人、長万部、無秩序な馬たち、ユーラップ川、海岸、アイヌの丸木舟、最後の朝、人を避けるヨーロッパ人
第47信	**芳しくない天候、伝道の熱意、政治的な動き、政府に関する意見、「搾取」、根気強さの欠如、日本の装甲艦、発展の現実**	削　除	削　除
第48信	楽しい最後の印象、日本の平底帆船、伊藤去る、私の感謝状、**公式書簡、召使の手紙、日本の書簡形式**	第四十二信	楽しい最後の印象、日本の平底帆船、伊藤去る、私の感謝状
第49信	楽しい予想、みじめな失望、台風に遭う、濃霧、不安な噂、東京で歓迎、最後の叛乱	第四十三信	楽しい予想、みじめな失望、台風に遭う、濃霧、不安な噂、東京で歓迎、最後の叛乱
東京に関する覚書	**著しい変容、「壮大な遠景」、気候、江戸城、役所街「江戸の封建屋敷」、商業活動、運河、通りと店のしるし、通りの名前**	削　除	削　除
東京に関する覚書（結び）	**共同墓地、火葬、鋭い批判、決まりきった考え方、現代日本の建築技術、工部大学校、デイヤー校長、通信局、外国の住まい、へつらいの表現形式、花祭り、富士の思い出、高くつく接待、新日本の頭脳**	削　除	削　除
第50信	**「くすんだ空」、「ラグズ」、森氏、大臣主催のパーティー、「芝の別館」、素人オーケストラ、日本のワーグナー、貴族の少女、若い踊り子、苦痛をあたえる謎、サウルの「葬送行進曲」、日本の音楽、楽器、パークス夫人**	削　除	削　除

第51信	広島丸、絵のように美しい漁船、親切なもてなし、伝道の中心地、居留地のモデル、地元街、外国貿易、女子寄宿学校、聖書教室、初めてのキリスト教新開、伝道学校の欠点、マナーとエチケット、「宣教師の態度」、前もって示された真理	削　除	削　除
第52信	外国人社会における隔たり、願掛け、山に囲まれた京都、三等車に乗って、芸術のふるさと、京都カレッジ、ジェーンズ大尉、デービス氏、カリキュラム、哲学熱、討論および学生の質問、完全禁酒日本初のキリスト教牧師、日本人が見たスコットランド、聖書の需要の高まり	削　除	削　除
第53信	仏教のプロテスタント、「英語を話す」お坊さん、西本願寺、門徒宗の祭壇、涅槃（ねはん）、秀吉の夏の館、輪廻転生、民主主義者釈迦、キリスト教の展望、英国での信仰に対する僧侶の評価、日本での見解の違い、疑問	削　除	削　除
第54信	京都で買い物、芸術的な模様、一つだけの飾り、日本の飾り棚、誠実な仕事ぶり、日本美術の荒廃、京都の西陣織、産業振興局、新しい病院	削　除	削　除
第55信	火鉢を抱きしめて、日本の 「暖房器具」、清貧、宇治の茶屋、茶を入れる、私達の最初の夜、奈良、古代遺物の宝庫、お伊勢参りがしたいんです、不要な旅行用具、巡礼者の神社、古代の修道院、ぬかるみをとぼとぼ歩く、髭無、きのこ栽培、不便を忍ぶ、主要な道路、こすり石	削　除	削　除
伊勢神宮に関する覚書	「伊勢の最も神聖なる神々の神殿」、伊勢神宮の神聖さ、神棚、伊勢のお守り、外宮の榊の木立、神社の境内、神聖な囲み、社、「最も神聖な場所」、日本の皇室の象徴、神道の鏡	削　除	削　除
第56信	わびしい神宮、二見様の伝説、二つの社、商店街、内宮の社、夕闇、神道の物悲しさ、神聖でない巡礼地の盛り場	削　除	削　除
第57信	私の車夫、あけすけの好奇心、津の町、仏教の寺、道路補修工事、鈴鹿峠、東海道、琵琶湖、禁酒の誓い、祭り	削　除	削　除
旅程表	京都から山田までと津経由京都までの旅程表	削　除	削　除
第58信	大阪の運河、垣間見た家庭生活、婦人達の愛玩動物婦人の地位、皇室の実例、医療伝道、日本の慈善団体不快な到着、キリスト教の集会、大津刑務所、キリスト教の行く末、空しい異教	削　除	削　除
第59信	好天気、日本の火葬、東京府知事、きまずい質問、つまらない建物、葬式費用の節約、火葬手続きの簡素さ、日本の見納め	第四十四信	好天気、日本の火葬、東京府知事、きまずい質問、つまらない建物、葬式費用の節約、火葬手続きの簡素さ、日本の見納め
日本の一般的事項	旧制度、新政府、封建制度の終焉、発展への宣誓〔五箇条の御誓文〕、陸軍、海軍、警察、郵便、鉄道および電信制度、商業船舶、造幣局、通貨、新聞出版、刑法典、教育制度、財政と税、国債、外国貿易、結び	削　除	削　除
付録	A.―蝦夷の平取と有珠のアイヌの言葉 B.―神道の覚書 C.―1879-80年会計年度の歳入歳出 D.―貿易	削　除	削　除

表２に見られるように、第１巻では新潟伝道、第２巻から蝦夷、東京、伊勢神宮に関する各覚書、日本の一般的事項と付録が削除された。

逆にほとんど削除されていなのは、第２巻の蝦夷の先住民（アボリジニ）［アイヌ］に関する項目である。初版刊行時に英国では、彼女がアイヌと生活を共にした記述は人類学の見地からの評価が高かった。それまで英国でほとんど知られることのなかったアイヌを日本のアボリジニとして紹介したのである。北海道部分で削除されたのは、自然に関する叙述――侵略的な蔓植物、庭園地帯、駒ケ岳火山、最後の朝――と利口なカラスが犬を出し抜いて、肉を奪う愉快な挿話だけである。

初版第Ⅱ巻では、評判の良かったアイヌに関する部分をほとんど残した一方で、京都、伊勢の旅行や、同志社と新島襄を訪ねた話や伝道に関するすべての部分が削除された。すなわち、第Ⅱ巻の後半（pp.184-347）の「東京に関する覚書」以下をそっくり削除したのである。

また、47信と48信のほとんどが削除され、普及版の構成は必要とされる彼女の旅（移動）に関する記述を別にすれば、その後半をアイヌに関する話題に焦点を合わせた。

省略版は、唯一削除されなかった59信（初版pp.306-310：東京を離れる直前の12月18日の最後の手紙）で終わる。

この削除と非削除がもたらしたのは、日本においては、イザベラ・バードは東北・北海道の農村生活の貧しさと農村にアルカディアというロマンチックな言葉を与えた女性旅行家であるという認識であり、欧米ではアイヌと日本の未踏の地（東北・蝦夷）を探検し、アイヌの紹介に貢献したレディ・トラベラーとしての評価だった。

２）削除内容

なぜ、このように評価されるようになったのか、削除内容をみてみよう。

(1) キリスト教・伝道に関する削除項目

キリスト教地区、英国国教会、キリスト教伝道、伝道拠点としての新潟、二人の宣教師、三年にわたる布教の成果、伝道拠点、日々の説教、医療伝道、日本における宣教師の苦労、「永遠の生命」を嫌う日本人、キリスト教の前途を阻む新たな障害、評判の説教師、厳粛な疑問、少ないムチ打ち、揺らぐ希望。

日々の説教、伝道の熱意、女子寄宿学校、聖書教室、初めてのキリスト教新開、伝道学校の欠点、「宣教師の態度」、前もって示された真理、カレッジ、ジェーンズ大尉、デービス氏、カリキュラム、哲学熱、討論および学生の質問、完全禁酒、伝道の中心地、日本初のキリスト教牧師、聖書の需要の高まり、キリスト教の展望、キリスト教の集会、医療伝道、キリスト教の行く末、空しい異教、仏教とカトリックの儀式における類似点。

(2) 日本の信仰（仏教・神道など）や迷信・葬式に関する削除項目

涅槃（ねはん）、芝の寺院、冥土のはかなさ、キツネが神様、大黒信仰、仏教の墓地、巡礼の季節、自然信仰の神社、宗教のあきらかな衰退、御神木、寺町通り、寺の内部、穏やかな仏教、死者の国の判定（閻魔）、民間に流布している迷信、生霊と幽霊、夢による前兆（正夢）、愛と復讐。

仏教のプロテスタント、仏教寺院、仏教の説法。「英語を話す」お坊さん、西本願寺、門徒宗の祭壇、輪廻転生、民主主義者釈迦、英国での信仰に対する僧侶の評価、「伊勢の最も神聖なる神々の神殿」、伊勢神宮の神聖さ、神棚、伊勢のお守り、外宮の榊の木立、神社の境内、神聖な囲み、社、「最も神聖な場所」、神道の鏡、わびしい神宮、二見様の伝説、二つの社、内宮の社、神道の物悲しさ、お伊勢参りがしたいんです、巡礼者の神社、古代の修道院、神聖でない巡礼地の盛り場、仏教の寺、願掛け、日本の火葬、葬式費用の節約、火葬手続きの簡素さ、共同墓地、火葬、日本の慈善団体、神道の覚書（付録B）。

(3) 医療に関すること

モグサ、針治療、漢方薬、いかさま薬、病院、病気の原因、悪い看護、防腐剤の取扱い、整頓された薬局、対立と不調和、日本の医者、函館病院、新しい病院（京都）。

(4) 日本人観・女性観

道徳改良、批判、言論の自由の範囲、日本の均一性、無秩序なミサ、鋭い批判、決まりきった考え方、日本での見解の違い、疑問、へつらいの表現形式、祝日の大群衆、あけすけの好奇心、親切なもてなし、婚礼、「女大学」、婦人の地位など９項目。

(5) その他

警察、弁護士、刑務所、会計、陸海軍、郵便、鉄道、通貨、出版、財政など48項目の諸制度および16項目の居留地やお雇い外人について、京都・大阪・神戸における記述のすべてと幾つかの個人的な記述や民俗学的な記述や植物に関するもの。

削除の結果

宗教および宗教的事項・俗信・迷信に関する削除項目が多いのが特徴である。また、築地、新潟、函館、神戸、大阪、京都の伝道・医療伝道拠点を訪問して現状を記したが、そのほとんどを削除した。これらの記述は彼女の記した時点での最新情報であり、欧米のクリスチャンは関心を持って読んだと思われる。ここで記された学校は同志社大学の前身である。

また、医療の近代化が進められていた当時の西洋式病院（函館病院、秋田病院）の興味深い記述が削除され、旧式の医者に関しての記述が残された。警察、師範学校など中央集権化を進める日本の諸制度や産業育成事業の見聞も消えて、その結果、非常に遅れた貧しい東北のイメージが強まった。さらに、日本人の道徳観および女性の立場への厳しい言及が消えた。

これらの削除により、俗信・迷信批判や日本の近代化の過程にある教育における道徳・宗教教育の指摘などイザベラ・バード自身の思考を示すものが薄められた。

すなわち、単に日本の近代化の進捗状況、彼女が日本で会った人々の記述が削除されたというだけではなく、*Unbeaten Tracks in Japan*（1880）の特徴であった鋭い西洋とアジアの文化対立の構図は見えなくなり、古い北日本の風景と生活が、以後の*Unbeaten Tracks in Japan*（1885）が表すところのものとなった。そして、省略版は古き良き時代の東北・北海道を背景として、イザベラ・バードの危険と苦労に満ちた「旅行と冒険の本」（本稿p.126）になったのである。

出版時の状況

初版の出版時著者にとって大切な二人が亡くなっていたが（本稿p.124）、省略版出版時は初版出版の翌年に結婚した夫である医師のジョン・ビショップ博士（エディンバラ大学で学位）が重篤な病に冒されて生命の危機に瀕していた。そのため1885年にはエディンバラの新居を処分してフランスやスイスへと転地療養していた。そのような状況の中でもビショップ医師の医療伝道支援（エディンバラ大学医学部は当時医療伝道活動の拠点であった）への熱意は強く、イザベラもそれを支持していた。彼女は1885年には日本にも近代看護婦養成学校設立のための基金を募り、実際にエディンバラ医療伝道協会を通じて、同志社系の京都看護婦養成学校に寄附をしている[29]。この基金を広く集めるためには、大衆化を狙った省略版の出版は格好のタイミングでもあった。日本の近代化部分の削除により、強調された迷信と古い慣習の下にあるアジア（具体的には日本の東北）の記述は、人々に異教徒に対する看護を含む医療および教育への人的・資金的支援を訴える手段となったと考えられる。

４．新版（１巻本）――1900, George Newnes, London（以下ジョージ･ニューンズ版）

1900年にMrs. Bishopの著者名で、新たに自ら撮影･現像した写真を取り入れ、出版社を替えて刊行された新版である。69歳になったイザベラ・ビショップ夫人が自らの手で、初版から削除した伊勢・

関西旅行と覚書を復活させたものである。１巻本であるが、内容は彼女自身が「私は私の旅行談をもう一度、変更無しで出版し紹介しようと思います」[30] というように２巻本で出された初版とほとんど変わらない。すなわち初版と同じく書簡形式を採り、省略版で削除された序章、小辞書、付録、索引、覚書も完全に復活させた。よって新版への序が新たに加えられた以外は、記述の全体構成は初版（本稿p.135、Ⅱ各版の特徴、１．初版［２巻本］）と完全に同じである。しかし、単語の微妙な変化やコンテンツが削られるなどのいくつかの変更もなされた。

１）イザベラ　L.　ビショップ夫人の社会的立場の変化を示す表記

（１）表紙に記されたMrs. Bishopの名

この版における一つの特徴は表紙および扉に示された彼女の社会的立場の明示にある。

濃い青の地にさらに濃い紺色の富士山が浮かび上がり、金字の表題が刻まれた表紙に、天金の美装本でそれまでの版より大型である（本稿p.143、図４）。

表紙と背表紙には*Unbeaten Tracks in Japan*でははじめて‘MRS. BISHOP’と結婚後の名前が記された。没後の1905年にジョン・マレー社から出された省略版の普及版（Popular edition）でIsabella Lucy Bird Bishopが用いられたのを除くと、これまで出されたこの本の著者名でビショップ夫人の表記が使われた唯一の版である。

（２）扉に記された社会的立場

扉ページ（p.145、図９）をみると‘MRS. J. F. BISHOP, F.R.G.S.（ISABELLA L. BIRD）’とイザベラ・バードの名は括弧の中に小さく収められている。F. R. G. S.（Fellow of the Royal Geographical Society［王立地理学会特別会員］）、Hon. Fellow of the Royal Scottish Geographical Society（王立スコットランド地理学会特別会員）、Hon. Member of the Oriental Society of Peking（北京東洋協会特別会員）と彼女の学術的立場が明らかにされ、さらにその下にはペルシャ・クルディスタンや韓国旅行記の著者であることが記されている（図10）。これらは彼女がまぎれもなくアジア地域の研究の専門家であることを示唆するものでもあり、彼女のイギリスにおける社会的地位および諸作品と講演活動に対する評価を示している。

初版が出版された1880年から20年の歳月はイザベラの社会的な立場を大きく変えていた。初版以来記されてきた妹への哀悼が示すように、彼女の手紙の受け手であったヘンリエッタの死、*Unbeaten Tracks in Japan*初版出版の翌年（1881）のジョン・ビショップ博士との結婚、それから５年後（1886）のジョンの死により彼女は未亡人となっていた。1891年には、扉に記されたように王立スコットランド地理学協会特別会員に推挙され、1892年には女性ではじめて王立地理学協会特別会員となった。この翌年の1893年にはヴィクトリア女王に拝謁するという栄誉が与えられ、講演活動も多くなっていた。

（３）扉に記された*Dai Nippon Bansai* の文字

初版から20年の歳月を経た日本は、日清戦争を経てアジアでの覇権を競う国々のひとつとなった「Dai Nippon」［大日本］でもあった。この本の扉には ‘***Dai Nippon Bansai***（“Great Japan for Ever”）’の言葉が刻まれている。

イザベラがローマ字で記した言葉「バンザイ」［バンサイ］は、日本の近代化の表現のひとつであった。1889（明治22）年２月11日の帝国憲法発布の式典で、帝国大学生が万歳を高唱したことが現在の万歳のはじまりとされる[31] といわれている。

朝鮮を旅行中だった彼女は、日本軍の侵攻により急遽朝鮮からウラジオストックへの退避を経て日本に滞在、滞在中の日本で、親交のあった朝鮮王妃閔妃の暗殺の情報を得るやいなや朝鮮に舞い戻り、目の当たりにした戦局を、時の英国駐日大使アーネスト・サトウにしばしば会って情報を提供し

ていた。*'Dai Nippon Bansai* ("Great Japan for Ever")' は彼女がいかに日本の変化に目を向けていたか分かる表記である。歓喜、敬愛、賞賛を表すために一斉に大声で万歳と発する集団のボディ・ランゲイジは中央集権国家として近代日本を形成する上で日本国民としての共通の感情を共有するための仕掛けとして大きな役割を果たすのだが、彼女はこのときそれに気付いていたのだろうか。

（4）'ACCOUNT'から'A RECORD'へと 'these volumes' から'my letters'への二つの変更が示す記録としての正確さへの自負

ジョージ・ニューンズ版では、副題がそれまでの「談」、「述べる」などを表す'An Account of Travels'から'A Record of Travels'と変更されて、記録の側面を強く打ち出された。

また同様にPREFACE[32] では、'these volumes'（これらの著作・作品）が 'my letters'（私の信書）へと変わり、見聞をありのままに記し、作為のないことを強調している。

この用語の変化の背後には、彼女自身「本書は日本研究ではなく、単に日本旅行記にすぎないものであるが……」と記してはいるものの、*Unbeaten Tracks in Japan*の舞台となった最初の日本訪問ののち、数度の日本滞在を経験したこと[33]、彼女自身の王立地理学協会特別会員という社会的立場の確立があり、古い日本の学術的記録としての自信を確信し題名の変更をしたのではないかと考えられる。これらの用語変化は小さい変化のように見えるが、彼女のこれは「お話」ではない「記録」であるというメッセージが込められていると考えられる。

新版へのイザベラの想いには、日本旅行が単なる未踏地の報告だけではない、日本での人びととの交流や彼女のアジア社会研究の原点となったキリスト教伝道、特に医療伝道を含む日本社会へ向けた彼女の視点の確かさへの自負があったと考えられる。さらに親しい人々の死から20年の時が過ぎたこの版では、他の全ての版に見られるレディ・パークスへの献辞、妹への哀悼の言葉が削除され、孤独な彼女の精神の自立を示したものと考えられる[34]。

この年の暮れ（1900年12月22日）には、70歳を目前にしたイザベラは、最後の大旅行となるモロッコへと旅立ち、翌年７月に帰国する。その報告は'Notes on Morocco' として雑誌に発表された。しかしモロッコ旅行記は単行本として出版されなかったので、この新版が彼女にとっての最後の単行本刊行となった。

２）ジョージ・ニューンズ版（1900）における初版からの追加・削除・変更

(1) *Unbeaten Tracks in Japan*におけるはじめての写真の導入

この版で特筆すべき点は、新しく掲載された写真である（初版には、イラストのみが載せられていた）。その中には、日光の宿泊先で出会った金谷家の家族や湯元の旅館の写真が含まれ、彼女の旅をさらに明確に把握できるようになっている。初版の挿絵(42枚)や地図(１枚)の全ても含めて57枚が掲載されているが、そのうち写真14枚(下記写真リスト)とルート図(１枚)がこの1900年版で新しく加えられたものである。

写真リスト

a.城の櫓〔熊本城宇土櫓〕(p.2)、b.エドウィン・アーノルド卿宅（p.6)、c.仁王（p.45)、d.金谷家の家族（p.73)、e.陽明門（p.80)、f.湯元湖（p.85)、g.湯元の宿（p.90）, h.店先（p.97)、i.神道の埋葬地（p.120)、j.ホテルのポーター(p.131)、k.神社への上り坂（p.432)、l.茶屋の給仕（p.435)、m.大阪の橋のたもと（p.452)、n.大阪城（p.457)

彼女はこれらの写真をいつ撮ったのだろうか。ストッダートによると彼女が王立地理学協会特別会員となったことは単なる栄誉と言うより実質的特典をもたらした。彼女は協会からカメラを借りるこ

とができたのである。また彼女はペルシャ旅行後の1892年春からロンドンのレゲント・ストリート・ポリテックで、ハーワード・ファマー氏の写真のレッスンのコースをとり、技術を学び1893年には現像するまでになっていた。朝鮮からマレー氏に宛てた手紙には次のように記されている[35]——

> 写真を撮ることは非常な楽しみとなっています。私はあまりに遅くはじめたので写真家になれず、またあまりに時間がなくてその技術を学ぶことはできなかったのです。しかし、芸術的というわけにはいきませんが私が見るものの記録となります。（拙訳）

また1893年８月25日のイザベラからB.Hチェンバレン宛ての手紙にはつぎのように記されている。

> 私があなたに会って以来、もっと旅行を進めるという観点から写真技術にとりかかり、今や写真の撮影、現像、プリントが一定の確かな程度まで出来るようになりました。（拙訳）

写真をはじめた時彼女は60歳だった。1894年１月から1897年3月にかけての４度にわたる朝鮮旅行を記した*Korea and her Neighbours*（『朝鮮奥地紀行』）と、1895年末から1896年にかけての中国旅行を記した*The Yangtze Valley and Beyond*（『中国奥地紀行』）にはいずれも写真が掲載されている。ことに後者ではスケッチは姿を消し写真が百枚以上も示されている。この旅行中に数回日本に立ち寄り、これらの写真を撮り、自分で現像したのだった。

1900年の新版では、上述のように新しく写真が加えられたが、ここに幾つかの問題がある。「仁王」（1900年版、p.45）の写真は、『中国奥地紀行』Ｉの「雷神、霊隠寺」（p.81）と同じである。つまり中国の写真が日本紀行に混じっているのである。この写真の問題ついて、金坂（1995）は、王立地理学会に所蔵されているイザベラ関係の写真のうちJAPAN（JAPAN=Chosen）に分類されている写真のほとんど（47点）は朝鮮のもので、単にJAPANとなっている写真４点の内２点は奉天のものであると述べ、さらに彼女の残した写真は没後王立地理学会に寄贈されたが、その整理にも問題があると指摘している[36]。

このような混同があるにせよ、この版で彼女が写真を取り入れたことの意義は大きい。これにより、彼女の記述の幾つかが見える形で示されたというだけではなく、彼女の旅の進化と新しいものへの挑戦の姿勢の顕われでもあるからだ。

（２）消えた内容表記（contents）と変更された柱の表現

ジョージ・ニューンズ版（1900）には、他の版に見られる手紙番号と日付間にあった内容表記がない[37]。初版以来*Unbeaten Tracks in Japan*には各信には段落毎になにが話題となっているかわかるようになっていた。

内容表記は頁上部（柱）に書かれたものが残されたが、表記は感情の入った初版とはかなり異なって冷静な感じを受ける。その一つは通訳の採用に関して初版では「見込みのない候補者」という柱表示だが、新版では「召使を雇う」になり、「祈りと紙つぶて」は「祈りと神社」、「生体解剖（刺身のこと）」は「魚」となっている。そして「模範的な召使」は「私の模範的な召使」に、「金谷さんの家」は「日光での私の家」と変わり、20年の年月が通訳の伊藤やその後も宿泊した金谷家（金谷ホテル）への温かい思いが伝わってくる表記になり、イザベラの心の変化が見えるようである[38]。初版のときの「イライラする凝視」、「うんざりする渡し舟」、「薄気味悪い住居」、「蚤だよ、蚤！」「夜のどんちゃんさわぎ」といった異文化体験の衝撃が見られた表記は消え、時を経て落ち着いたものになったことをうかがわせるものであるが、彼女の心が受けた驚愕が隠されたようで残念な面もある。

（３）キリスト教に関する部分の記述の削除と変更

この新版の内容には先述のように初版との間にほとんど違いがない。「貿易、法律、金融、教育、陸海軍」を記した部分（マレー初版（1880）Ⅱ、pp.314-346）が「この国の現在の状況に妥当しないので」という理由で省略されているだけであるが、細部に変更が見られる。変更は以下の通りである。ページはいずれも英語原書による[39]。

（ａ）第58信中の原注１

初版：「この手紙を書いて十か月後には、人数が１万５千人に増えていた。」（初版［1800］Ⅱ、p.301）

新版：「この手紙を書いて以来大きく増加している。」（新版［1900 ］、p.458）

ここで増加したとされているのは「長年にわたる多くの人の努力で、千六百人もの人がプロテスタントに改宗した。」と書かれた改宗者の人数である。

（ｂ）

初版：「日本を支配する精神は、明治十一（1878）年十月十九日付けの、最も影響力のある新聞に掲載された「キリスト教は日本にとってなんの役に立つのか」という論説からの次の抜粋によく表れている。……」（p.302、原注１）

新版：「以下は明治十一（1878）年十月十九日付けの、最も影響力のある新聞に掲載された「キリスト教は日本にとってなんの役に立つのか」という抜粋である。以下略」（p.459、原注１）

新版では上述文の下線部、書き出しのところが削除された。この原注は、明治11年9月6日の郵便報知新聞の論説についての記載である[40]。

（ｃ）第58信後ろから３段落目（新版原文、pp.459、３行目-460、４行目）は、宣教師についての記述であるが、初版（Ⅱ、原文pp.303、１行目-304、３行目）では次のように書かれていた。

初版：「たぶん宣教師が外国の食事の席で「やり玉に上がった」時代は過去のものとなっただろう。だが反宣教師感情は相変わらず強く、彼らは良くも悪くも感情を害する原因となっている。なかには避けられるものがあるかもしれない。きっと彼らは素直に自分達の短所、欠陥、誤りを認めているのだろう。にもかかわらず彼らは誠実そのもの、良心的、高潔かつ熱心な男女の団体である。だから最善と思う方法で、みな一生懸命努力し、名ばかりの改宗者を増やすより真の教会を作ることに情熱を傾けている。さまざまな宗派の当事者達は外見上の対立さえも控え、親しく協議するために集会を持っている。監督教会派、バプチスト派、組合教会派等という区々の名称を永続させるのではなく、「キリストの弟子であることが優先される」のである。」（下線部引用者、注11文献、pp.279-280）

この文の下線部分、日本における初期の伝道に見られた超宗派の伝道に関する記述が削除された[41]。

（ｄ）他には、‘forty miles’（初版Ⅱ1880、p.297-26行目）→‘40 miles’（Putnum’ s Sons、1900 、p.455-14行目）や‘1617’（初版Ⅱp.301）→‘1,617’（新版p.458）のような数字や単位の表示形式の変更があったが、特に取り上げることはしない。またローマ字表記の変更は他の版も含め後に別稿で取り上げる。

以上見てきたような変更があるが、非常にわずかなものである。しかし、わずかなだけに、これらに問題点があったか（ｃ）、あるいは統計的に変化が起こったものを丁寧に削除や変更を加えたと見

られる。また（ｂ）の変更はもはやそれは「日本を支配する精神」ではない、と考えたからなのか、このわずかな変更の影に彼女の観察したものが見えるのである。

出版時の状況

1898年１月に*Korea and her Neighbours*、1899年11月に*The Yangtze Valley and Beyond*が出版されたのに続いて1900年に*Unbeaten Tracks in Japan*の新版が出版された。日清戦争下の朝鮮の情勢を記した*Korea and her Neighbours*は出版から10日で２刷目が出るという爆発的売れ行きだった。１年を待たずしてアメリカでも5刷を数えたベストラーであり、続いての中国、日本の旅行記の刊行となり、彼女はこれらの地域をテーマとした講演活動に忙しかった。しかし彼女の体調は優れず、長年彼女の帰る場所であったマル島トーバーモリのヘンリエッタの想いでの深いコテイジを諦めて、この出版の頃にコテイジの借家契約を返している。

またこれら朝鮮、中国、日本３つの本には写真が取り入れられているという他の旅行記には見られない共通点があった。この1900年版にはMRS. J. F. BISHOP, F.R.G.S.として改めて極東３部作を完結させる意図があったと考えられる。

５．これまでに出版された主たる英語版の特徴一覧と没後の出版

表３（巻末表）　英米で出版されたUnbeaten Tracks in Japanの諸版

番号	出版年	出版社	副題の特徴	巻数・形式内容	献辞	はじめに*（by Bird）削除行数	序文著者**（初版序文以外）	リスト	地図	挿絵含地図（枚）	序章	小辞典	付録	索引
①	1880	John Murray（London）	**An Account** of Travels …and **Ise**	2 信書	○	○	×	○	○	43	○	○	○	○
②	1880	Putnam's sons（N.Y）	**on horse back** …and **Ise**	2 信番号無	○	○	×	○	○	43	○	○	○	○
③	1885（1888）（1905）	John Murray	**An Account** of Travels …of **Nikko**	1 信書	○	５行削除他２箇所	×	○	×	40	×	×	×	○
④	1900	George Newnes（London）	**A Record** of Travels…… and **Ise**	1・信書 内容①に同	×	９行削除他２箇所	Mrs. Bishop	○	○	絵43 写14	○	○	○	○
⑤	1916	Dutton	なし	1 信書	○	５行削除他２箇所	×	○	○		×	×	×	×
⑥	1973	Tuttle	③に同じ	1 信書	○	５行削除他２箇所	Terrence Barrow	○	×		×	×	×	?
⑦	1984	Virago	なし	1 信書	○	５行削除他２箇所	Pat Barr***	×	×		×	×	×	×
⑧	1987	Beacon Press（Boston） Virago &Beacon	なし	1 信書	○	５行削除他２箇所	Pat Barr	×	×		×	×	×	×
⑨	1997	Ganesha Publishing & Edition Synapse（Tokyo）	**An Account** of Travels … and **Ise**	2 信書 初版と同	○	○	×	○	○		○	○	○	○
⑩	2000	Traveler's Tales（San Francisco）	なし	1 信書	○	５行削除	Evelyn Kaye****	×	×	10	×	×	×	×

注：○＝有　×＝無

*はじめに（preface）は初版からの変化を示した。

**序文著者:Mrs. Bishopは新版［1900］序文、他は著者没後の第三者による序文。

***著書Pat Barr（1970）, *A Curious Life For a Lady*： *The Story of Isabella Bird*, Macmillan, John Murray

****著書 Evelyn Kaye（1999）, *Amazing Traveler Isabella Bird*, Blue Panda Publications

・リストはLIST OF ILLUSTRATIONS

・小事典＝GLOSSARY OF JAPANESE WORD & WORDS USED IN COMBINATION

・その他：⑦⑧⑩には著者紹介（About the Author）が付いている。

・③の1888、1905年版はその後の変化の有無を確認した。

本稿では*Unbeaten Tracks in Japan*の現在までに出版されているもののうち10種の版を取り上げた。このうち巻末表の①②④⑨の４つの版は①の初版（２巻本）を定本としている。特に著者没後の1997年に出されたGanesha Publishing & Edition Synapse版は正誤表（ERRATA）も含め忠実に初版を再現した復刻版であり、誰もが初版がどのようであったかを知ることが出来るようになり、我が国におけるイザベラ・バード研究を大きく進めた。

残りの（⑤⑥⑦⑧⑩）はマレー社の1885年の③の省略版（abridged edition）を踏襲している。タトル版は菅江真澄の絵（蝦夷國女子含口琵琶）が表紙に使われている。

著者の没後の出版でなされた改訂で特徴的なのは、ペーパーバック版では、いずれも1885年の省略版を踏襲しつつも、タトル版（表３.⑥）を除いては1885年には付されていた副題の表示がなくなり、主題のみが示されていることである。また、省略版で削除された序章、付録、小辞典に加えて索引もなくなっている。写真を含めた図版の最も多いのは、1900年の初版復活版（表３.④）の57枚であるが、著者没後のペーパーバックでは、2000年のTraveler's Tales（表３.⑩）版に見られるように挿絵は10枚を残して省略されるなど廉価版を実現しているのが特徴である。

おわりに

生涯に４種の版を出した*Unbeaten Tracks in Japan*はイザベラ・バードにとって特別な本であるといえる。人生においては、結婚前の最後の旅行で最後の本であり、1900年の新版による再刊は彼女の人生最後の出版である。そして、その表紙・扉はその時代背景と女性として最初に学会に認められた彼女の立場が反映されている。

初版の評価はレディ・トラベラーとしての地位を確立し、それによりアジア研究者としての入り口に立ち、その後のアジア旅行とその旅行記を以ってアジア研究者としての立場をも確立した。1900年版は、極東３部作の完結に加えて、扉の既刊旅行記の列記からペルシャ、朝鮮、中国、日本を旅行地域とするアジア４部作として彼女が認識していたと考えられるが、小チベット旅行を記した*Among Tibetans*をペルシャ・クルディスタン旅行から独立させると５部作となる。アジア研究家としての観点からのイザベラ・L・バード＝ビショップの旅の意義の再検討が必要と思われる。

他方で、1885年の削除版（１巻本）は、２巻本（1800年の２種の版、1900年新版）とは別の本としてみるべきである。削除により消えた情報はあるものの、重複がなくなり、軽快でリズムのある冒険と未知の世界の旅行記として、広く読まれ続けたという意味で成功した本といえる。

もともと２巻本には、古い東北と近代化の進んだ居留地や開市とが、一冊の本に入っていたのを、古い日本のみを残し、新しい本として構成し直したと見るべきなのである。これは、ロッキーとハワイを１冊の本に構成しようとしたイザベラに対してマレー３世の助言により、別々の旅行記とした経緯と似ている。

すなわち、イザベラ・バードは省略版を単なる削除でなく、新しい本として自ら構築しなおしたの

だった。

彼女にとって、２巻本と１巻本はともに意味のあるもので、今日においてもこの２種の*Unbeaten Tracks in Japan* の存在は、イザベラ・バードの読者並びに研究者にとって２種あること自体が重要な意味を持つものであると考えられる。そこには、イザベラ・バードが日本に向けた眼差しの複雑さが顕われていると思われるからである。

省略版に残された彼女が好きな未踏の地のアイヌの人々と素朴で勤勉な東北の農村の人々への惜しみない賛辞と共感が示される一方で、ふんだんに使われる原始的、野蛮、未開という言葉。省略版ではほとんどが削除されたキリスト教精神の優位さを背景にしてなされる人々の迷信深さと偶像信仰、売春を容認する遅れたアジアの国日本に対する鋭い言及の対立が初版の中に混在している。

キプリングが「白人の重荷」と詠ったキリスト教精神に基づいた西洋の近代文明のアジア･アフリカ諸国への押し付けとパックス・ブリタニカ（英国の支配の下での平和）を疑うべくもない大英帝国興隆期（来日前年の1877年にヴィクトリア女王はインド皇帝になった）にあって、彼女にとって初めてのアジアの国、日本でその古来の文化が西洋文明の侵食を受けて変わっていくことに深く心を痛めていた。彼女は未踏の地とそこに住む先住民が好きで日本以前の各地（アメリカ、ハワイ、オーストラリアなど）の旅行でも必ず先住民族と寝食を共にして、理解と愛情ある共感を記している。しかしそこに幾分の蔑視が含まれているのを見逃すわけにはいかないのだが、それでも彼女はあくまでも古来からの固有の純粋な文化を愛する者であった。彼女はキリスト教文化を母体とする西洋文化の導入による日本の近代化を評価しながらも、しかし、その古来の文化が変形し、消えつつあることを悲しんでいた。しかも科学は母体たるキリスト教を拒みつつ、急速に日本文化に浸透していた。彼女は「だれでもこれらの人々の間で生活して、彼らの素朴な徳と素朴な悪徳や、農民の着る蓑の下で脈打つ心がいかに優しいかを学んだならば、このような、あるいは、多くの似たような疑問（キリストは彼らを救えるのか、あるいは彼らにキリスト教は必要なのかという疑問）が、湧き上がってくるにちがいない。」（括弧内引用者）（*Unbeaten Tracks in Japan,*１p.391 ）と東北最後の宿泊地黒石で述べている[42)]。この答えはのちの日本への支援、アジアでの医療伝道支援、伝道講演となって顕われる。

また、手紙形式を取らなかったパトナムズ･サンズ版は、著者が各信に設定したテーマが示されていてイザベラ・バードの旅の解明に欠かせないものである。

注＆文献

１）第２版は未確認。確認できる方がいらしたら御一報願いたい。
省略版の扉では他に、1885 年は‘WITH FORTY ILLUSTRATIONS’とあったのが、1888 年の３版ではFORTY（40）の表示がなくなり、‘WITH ILLUSTRATIONS’のみとなった（図６、７）。

２）神成利男訳（1969）『日本の知られざる辺境（北海道篇）』札幌郷土研究社：1885 版の北海道の部分の訳。
再刊：神成利男訳（1977）『コタン探訪記』北海道出版企画センター
他に北海道の部分の訳本（原本：普及版［1911 年版］）は、小針孝哉訳（1977）『明治初期の蝦夷探訪記』さろるん書房がある。これにはアイヌ研究者の高倉新一郎による註解とアイヌの人たちの生活を知ることの出来る数葉の写真および川上澄生の版画が掲載されていて、資料としての価値が別にある。

３）火葬場見学などのこと。（高梨健吉訳［1973］『日本奥地紀行』平凡社、2000、pp.509-513

４）Anna M. Stoddart (1908) , *THE LIFE OF ISABELLA BIRD* (*MRS. BISHOP*) , John Murray, p.105

５）パークス夫人は 1879 年 11 月 12 日に亡くなった。ちょうどイザベラは日本旅行記を執筆中であり、その旅行記 *Unbeaten Tracks In Japan*はパークス夫人に捧げられた。またサー・ハリー・パークスが亡くなったとき、伝記をイザベラが書くと言う話もあった。結局『パークス伝』はディキンズによって書かれたが、彼女自身*Unbeaten Tracks in Japan*の中にディキンズの提供による七夕の話などを挿入していることからも彼らは協力関係にあったと考えられる。

６）Kay Chubbuck, ed. (2003) *Letters to Henrietta,* Northeastern University Press.（ヘンリエッタはイザベラの妹）。

７）*Ibid*., p.205

８）関西部分については「それから広島丸で横浜から神戸に向った。神戸では、ハワイで布教活動をともにしたガリック（O. H. Gulick）夫妻と旧交を暖め、神戸から京都、奈良、伊勢神宮、琵琶湖、大阪へと旅をして、船で

東京へ戻った」。( ) 内筆者、また、「ハワイで布教活動をともにした」という記述は事実と反する。

９）挿絵の尖った形に対して次の原注が付けられている。
＊――これは全く例外的な富士山の姿で、例外的な天候状態によるものである。ふだんの富士は、もっとがっしりと低く見えて、扇をさかさまにした形によく譬えられる。(『日本奥地紀行』p.24)（Beacon Press版 ⑧ の表紙に使用）

10)「当地へ帰ってみたら、パークス夫人が私のために必要な準備をやってくれていた。」(『日本奥地紀行』(注 3)、p.51)

11）イザベラはパークス夫人が日本を去るにあたり、日本の外国人社会の誰もが彼女の離日を残念に思っていること、パークス夫人の親切さと思いやりについて東京を去る直前に記している。(楠家重敏、橋本かほる、宮崎路子(2002)『バード日本紀行』雄松堂出版、p.210)

12）ストッダートの「ミス・バードの本部は今や２ヶ月近くも東京の公使館であった」(本稿p.117）という誤りは省略版のこの日付によるものである。

13）初版「挿画は、日本人画家の筆になる三枚を除いて、私自身か日本人が撮った写真から版をおこしたものである」は、省略版では、三枚の後ろに括弧で（本書では一枚）と入っている。すなわち日本人画家の手になる絵３枚のうち２枚を削除したということである。

14）序文引用は、注 11 文献、pp.iv-v

15）前掲書、p.ii、12-13 行目

16）前掲書、p. iv、『日本奥地紀行』(注３)、p.20

17）Stoddart（1908）(注４)，p.139、マレー氏宛の手紙

18）*Ibid*., p.139

19）*Unbeaten Tracks in Japan*はイザベラ・バードの生前の印税収入の３分の１を占める。(金坂清則［1995］「イザベラ・バード論のための関係資料と基礎的検討」『旅の文化研究所研究報告書』3、p.58)

20）出版を予定とした手紙を故国に送りのちに出版する方法は、ダーウィンもとった手法である。(「手元には、いずれは出版するつもりで家族に書き送った七七○ページにも及ぶ日誌という完全な記録がある。」(エイドリアン・デズモンド＋ジェイムズ・ムーア（1991)、渡辺政隆訳［1999］『ダーウィン』工作舎、(Ⅰ)、p.256.）ただし、日本旅行に関してのイザベラの手紙はほとんど残っていない（本稿p.2 参照)。

21）付録部分の訳：高畑美代子（2008)『イザベラ・バード「日本の未踏路」完全補遺』、中央公論事業出版、pp.161-186

22）高畑（2008)「*Unbeaten Tracks in Japan*の省略版の削除の目的と結果――ブラキストンとケプロンのイザベラ・バードへの批判をめぐって――」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第５号（平成 20 年 12 月、pp.76-7 を参照されたい。

23)『種の起源』の改訂版で、マレーが定価が半額の廉価版を新たなセールスの中心に据える計画を立てた。新しい一章と、2000 以上のセンテンスが書き加えられた。この改訂版を小さい版型に活字を組みなおした。そのせいで誤植だらけになってしまったが頁が 142 ページも減り、紙代だけでも１部につき六ペンスの節約になった。原注★３p.981 Pecham, *Origin*, 22-23; Freeman, *Works*, pp.79-80; MLD 1:332.（エイドリアン・デズモンド＋ジェイムズ・ムーア（1991)、渡辺政隆訳（1999)『ダーウィン』、工作舎、Ⅱ, p.842)

24）高畑（2008)（注 22）:削除理由として問題とされる部分の詳細の比較検討をして、それまで言われてきたようにブラキストンらの批判によるものないことを明らかにした。

25)『バード 日本紀行』(注 11)、p.359

26）Stoddart（1908)（注４)、p.168

27）削除内容：喫煙について、農村統治について（郡長、戸長、県令）

28）原文はミッシング・リンク：生物の進化において、存在が推定されていながら未発見の仮想の動物：特に類人猿とヒトをつなぐ動物。(ランダムハウス英和大辞典第２版)

29）高畑（2009)「イザベラ・バード（ビショップ夫人）の日本旅行記以後の日本との絆――日程とジョン・ビショップ孤児院・その他の寄附を中心に――」『英学史研究』第 42 号、日本英学史学会、pp.39-64

30)「地方においては、この４年間に私が目にした例から判断すると、交通施設の増加、高等教育、新聞や人びとの生活の変化は非常にわずかなものなので、私は私の旅行談をもう一度、変更無しで出版し紹介しようと思います。それは、「踏みならされた道」から脇に逸れたところにある現在の日本の非常に公正な姿を提供できると信じているからです。」(「新版への序文」)

31)『増補明治事物起源』東京春陽堂。万歳の歴史は古く平安時代から記録に見られるが一般の人々が大きな声で歓喜、敬愛を示すボディランゲイジを公式に使ったのがこの帝国憲法発布式典である。

32）本稿p.121-2 に「まえがき」の終わり３節を掲載。

33）高畑（2009)、(注 29)

34）イザベラには大勢の友人たちがいて、生涯を支えてくれたが、彼女の家庭を構成した身近な肉親は皆亡くなっていた。

35）Stoddart（1908)、pp.259,266,277.

36）金坂清則（1995）「イザベラ・バード論のための関係資料と基礎検討」『旅の文化研究所研究報告』vol.3、pp.7-8
金坂（2005）『イザベラ・バード極東の旅』Ⅰ、Ⅱ　平凡社
なお中国の写真は1900年に*CHINESE PICTURES* Notes on Photographs Made in ChinaとしてCASSEL AND COMPANYからMRS.J.F.BISHOPの名で出版されている.
37）'Letter Ⅰ. ORIENTAL HOTEL,YOKOHAMA,May21'のように表記されている。
38）高畑（2009）、（注29）に日光での宿泊日程を載せた参照されたい。
39）原書と邦訳書で原注番号が変わっているのは、原書が頁毎の脚注になっているのに対して、邦訳書は章末（便末）注をとっていることによるものである。
40）『バード 日本紀行』（[注11]、pp.281-5）に全訳と元になった社説が記載されている。さらに楠家氏は、彼女の記した新聞の日付の違いやタイトルの違い（同社説タイトルは「耶蘇信徒ノ不所存」）についても指摘している。
41）高畑（2006）「イザベラ・バードに会った３人の学生クリスチャンと弘前教会・東奥義塾の活動」『弘前大学地域社会研究科年報２』pp.46-8
42）この部分邦訳「厳粛な疑問」は高畑（2008）注21、pp.130-1。
当時の東北の人々の生活の実際は『イザベラ・バードの北東北』（高畑美代子［2009］陸奥新報社）を参照されたい。

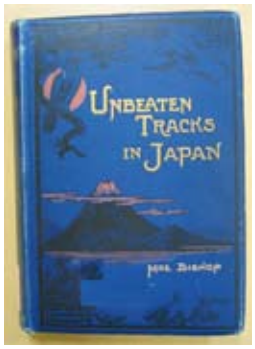
図１．初版、1880年　　図２．省略新版、1885年

John Murray、London（北海道大学蔵；初版受入年；1888年３月）

図３．ファクシミリ版、1880年

Putnam's sons、New York

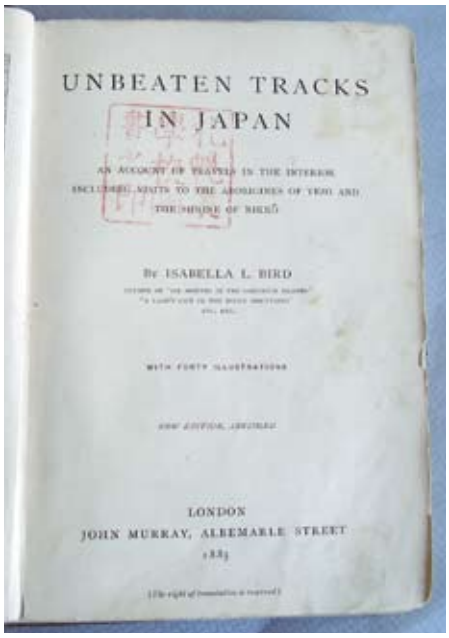
図４．新版、1900年



George Newnes、London（名古屋大学蔵）

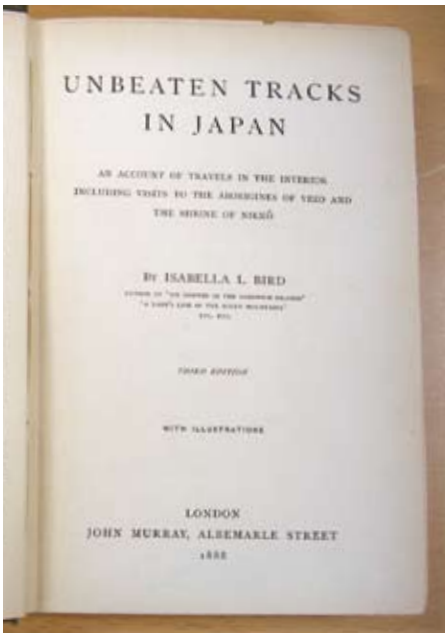
図５．背表紙の表示

図６．1885年版



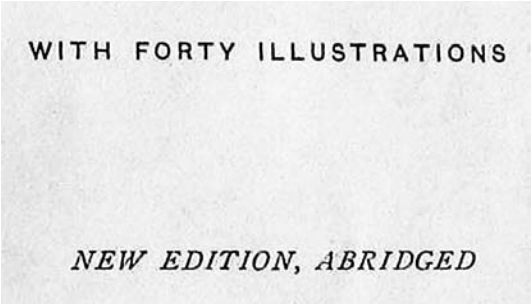
NEW EDITION, ABRIDGED

図７．1888年版



THIRD　EDITION

1885年版部分拡大



1888年版部分拡大

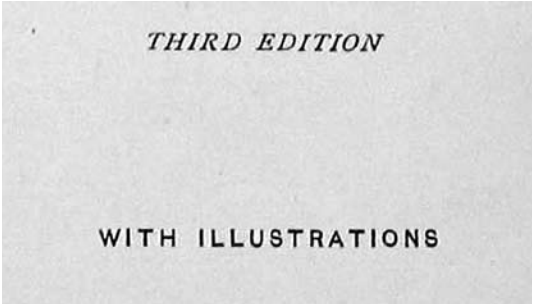


図８．レディ・パークスへの献辞

To the Memory
OF
LADY PARKES,
WHOSE KINDNESS AND FRIENDSHIP
ARE AMONG
MY MOST TREASURED REMEMBRANCES OF JAPAN,
THESE VOLUMES ARE
GRATEFULLY AND REVERENTLY
DEDICATED.

図９．　George Newnes(1900)版扉

UNBEATEN TRACKS
IN JAPAN

A RECORD OF TRAVELS IN THE INTERIOR,
INCLUDING VISITS TO THE ABORIGINES OF YEZO AND
THE SHRINES OF NIKKÔ AND ISE

BY
MRS. J. F. BISHOP, F.R.G.S.
(ISABELLA L. BIRD)
Hon. Fellow of the Royal Scottish Geographical Society, Hon. Member of the Oriental Society of Peking
AUTHOR OF
"JOURNEYS IN PERSIA AND KURDISTAN," "KOREA AND HER NEIGHBOURS," ETC.

WITH MAP AND FIFTY-SIX ILLUSTRATIONS

Dai Nippon Banzai
("Great Japan for Ever")

NEW EDITION

LONDON

図10．学術的立場を表示（図９の部分拡大）

BY
MRS. J. F. BISHOP, F.R.G.S.
(ISABELLA L. BIRD)
Hon. Fellow of the Royal Scottish Geographical Society, Hon. Member of the Oriental Society of Peking
AUTHOR OF
"JOURNEYS IN PERSIA AND KURDISTAN," "KOREA AND HER NEIGHBOURS," ETC.